特攻報会

平成27年11月

第107号

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会

〒102-0073　東京都千代田区九段北3-1-1靖國神社遊就館内・地階

電　話　03（5213）4594
ＦＡＸ　03（5213）4596

http://www.tokkotai.or.jp

振替口座　00140-6-59580

編集人　飯田正能
発行人　羽渕徹也
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

目次

第64回特攻平和観音年次法要……1
平成27年度全日本空挺同志会第60回高野山慰霊祭に参列して……8
第48回戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭に参列して……11
追悼・陸軍特攻第23振武隊隊長・伍井芳夫大尉……13
戦艦ウェストバージニア発見我突入ス！――特攻隊第23振武隊長伍井芳夫――……15
講演会「人間魚雷回天」に参加して……21
謹んで回天の英霊に捧ぐ舞台「たからモノ」を観て……21
第18回憂国碑「鎌地蔵尊」御霊祭に参列して……22
第17回第二国分基地十三塚原神風特別攻撃隊慰霊祭に参列して……23
終戦70年、特攻の兄に捧ぐ「五体を砕きて悠久の大義に殉ず」……24
《若者の声》若者たちの「無関心」他二編……31
特攻隊に関する新聞記事の紹介……34
特攻名簿「村山光一」について……37
陸軍九七式戦闘機について……39
新刊図書紹介……42
事務局からの報告等……43

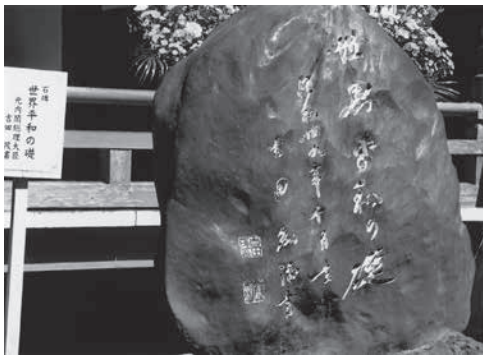
第64回特攻平和観音年次法要

日　時　平成27年9月23日（水）
　　秋分の日　14時～15時20分
場　所　世田谷山観音寺・特攻観音堂
参列者　御遺族29名を始め御来賓・会員等約180名、他に当日受付の一般参列者40数名、合計約230名

式　次　第

司会　及川　昌彦
　　藤田　信之

世田谷山観音寺特攻観音堂



「世界平和の礎」の碑・吉田茂元総理大臣書

梵鐘点打　三回
式衆入堂　世田谷山観音寺山主他
　　駒繋神社宮司
国歌斉唱　トランペット　堀田　和夫
山主願文　特攻平和観音経
　　世田谷山観音寺山主　太田　賢照
神　儀　駒繋神社宮司　澤田　浩治
　　修祓の儀・降神の儀・献饌の儀
　　祝詞奏上・玉串奉奠・撤饌の儀
祭文奏上　公益財団法人
　　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
　　理事長　杉山　蕃
挨　拶　世田谷区長　保坂　展人
献　吟　一誠流　吉野　一心
　　龍笛　逢坂　龍信
献　奏　トランペット　堀田　和夫
「鎮魂　同期の桜」
慰霊献歌　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
　　男性合唱団と共に全員合唱
　　トランペット　堀田　和夫
「空の神兵」「若鷲の歌」
「海ゆかば」
奉納献奏　甲飛喇叭隊第11分隊
　　隊長　原　知崇
玉串奉奠　顕彰会理事長、世田谷区長、御遺族・御来賓代表
　　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
　　理事長　杉山　蕃
　　世田谷区長　保坂　展人
　　御遺族・御来賓各位
　　会員・一般参列者全員
式衆退堂
池前祭　山主　読経、神官　修祓・
　　祝詞奏上後、式衆退場
直　会　15時30分～16時30分

献　吟　吉野　一心
　　笛　逢坂　龍信
　　万朶隊　川島　孝

昭和19年11月5日フィリピン・ニコラス上空で戦死
九重（ここのえ）の御階（みはし）の花と散らんこそ
我れもののふの思いなりけり

菊水五号琴平水心隊　湯上和夫
昭和20年5月4日沖縄海域で戦死
ひとひらもとどめじと散るや桜花
せめて残さん花の香りを

第64回特攻平和観音年次法要

平成27年9月23日（水）秋分の日、世田谷山観音寺・特攻観音堂において、第64回特攻平和観音年次法要（注1）が厳かに、盛大に斎行された。

今年も全国各地で異常な猛暑日、前例のない集中豪雨や強風・竜巻と、異常気象が続いたが、さすがに彼岸の入りの20日（日）から23日までの4連休は好天に恵まれ、この日は猛暑も一段落し、爽やかな初秋の蒼空を迎えることができ、年に一度の年次法要が無事斎行できたのは何よりであった。正に英霊の御加護と言うべきであろう。

今年も年次法要は、世田谷山観音寺山主太田賢照僧正と地元の氏神・駒繋神社（注3及び会報『特攻』第73号参照）澤田浩治宮司の共斎による神仏習合で行われた。太田賢照山主の提唱により平成19年に始められた神仏習合（注2及び会報『特攻』第73号参照）による法要も既に8回目となり、すっかり定着した感がある。

神仏習合については、既に何度か紹介したが、神と仏を同様に崇拝するという日本人の持つ優れた融和の精神の表れである。1300年来、日本人の精神性を形作ってきた「神仏習合」ないし「神仏共存」の信仰は、「万物生命観」ないし「万物生命教」とも称され、世界で最も普遍的な宗教とも言えるのではないか。この布教活動は、既に世界平和運動の一環として進められているが、現在の世界情勢の中で、イスラム教徒の国々とキリスト教徒の国々の対立、またその中でのそれぞれの宗派の対立が、世界平和の大きな脅威となっている、このような時にこそ融和ないし大和の精神、和を尊ぶ心をもってお互いを尊重することが、その解決策の一助になるのではないか。

午前中、筆者はまず駒繋神社に参詣すべく、下馬5丁目でバスを降り、公園下の遊歩道から朱塗りの橋を渡って境内に入った。坂下から見上げる神社の森は、松や欅、楓や桜などの大木が茂り、昔ながらの鎮守の森の様相をそのままに留めている。かなり急な坂道を上って拝殿前に至ると、境内は綺麗に掃き清められ、小規模ながら神楽殿や斎殿も設けられている。樹齢400年以上と言われた、源頼朝公ゆかりの「駒繋の松」（五代目）の大木は、松食い虫に侵食されて枯死したため、一昨年伐採され、現在、六代目の若木を生育中とのことであるが、その近くには、区の名木百選選定樹ともなっている木斛の巨木なども聳え立っており、この神域だけは、貴重な武蔵野の面影を今に留めている。

朱塗りの社殿は、瀟洒ながら、豊穣祈願の子の神、出雲大社の御分霊を守護神とすると共に、源氏ゆかりの武運祈願の八幡神としての風格を備えた立派なお社である。国の平安と特攻勇士の御霊安かれと祈念し、社前を辞して世田谷山観音寺へと向かった。

駒繋神社の南約400m程の台地にある世田谷山観音寺境内も、いつもは静寂の気に包まれているが、この日は午前の早い時間から会員有志や奉仕の方々による受付準備、祭壇設営等の作業で賑わっていた。

特攻観音堂前には沢山の美しい季節の花を盛った供花が並べられ、お堂の向かって左側にある故吉田茂元総理大臣の筆になる「世界平和の礎」の碑が一段と重厚さを加え、特攻勇士たちの偉業を想起させられた。英霊の方々が身を捨てて護ろうとしたこの国、この民族、引いてはアジア諸国の独立と平和。正にその尊い礎となられたのである。ビルマ（現ミャンマー）の初代首

特攻勇士之像

「特攻勇士之像」碑前祭

願文奏上・太田賢照山主（特攻観音堂内）

祝詞奏上・澤田浩治宮司（特攻観音堂内）

相バー・モウ氏も「特攻隊は、世界の戦史に見られない愛国心の発露であった。今後数千年の長期にわたって語り継がれるに違いない。」「カミカゼの精神、それは新しい東アジアの真の基礎となりつつあり、いかなる敵も打ち破ることのできない自己犠牲の精神、勝利のために死をいとわない精神である。」「神風の精神が滅びない限り東アジアも決して滅びない」と述べている。誠に、特攻精神こそ、我が国のみならず、東アジアの、そして、世界の「平

祭　文

本日、平成27年秋分の日に、ここ世田谷山観音寺におきまして、御遺族・戦友及び関係者相集い、第64回特攻平和観音年次法要を斎行いたすに当たり、謹んで在天の御英霊に申し上げます。

今年は終戦70年の節目の年、畏れ多くも天皇、皇后両陛下のパラオ戦跡行幸啓を始めとし、例年の如く各種の慰霊事業が執り行われました。また、従来の慣例から戦後70年総理談話が発表され、これからの平和国家としての我が国の展望について、その方針が明示されました。誠に結構なことと存じます。しかし、他方マスコミの報道、野党の対応は、首肯できるものではありません。テレビ時代になって40年、同じ画像を毎年報道し、戦争の惨状を伝え、年老いた老女に「戦争はいけない」と語らせます。それ自体は、誰も反対するものではありませんが、そのためにはどうするべきかという展開は全くありません。マスコミ報道の浅薄さの最たるものであります。野党政治家の対応も目に余るものがあります。折から安保法案が審議、可決成立しましたが、その審議は、党利党略に溺れ、「戦争法案」といった過激な用語を弄び、いたずらに国民を惑わし、政治不安、延いては社会不安を煽動するがごとき言動は、政治として不遜の極みと申せましょう。政治たるものは、国民を奮い立たせる高い理念の下、堂々たる施策を展開し、論戦を行い、ここに祀る御英霊の皆様に立派に奉奏できる高い次元の姿勢が何より重要と考えております。

さて、私ども特別攻撃隊戦没者慰霊顕彰会もここ1年、靖國神社、当世田谷山観音寺におきましての年次追悼行事を始めとし、各県護国神社への「特攻勇士之像」の寄進、フィリピン・マバラカットを含む全国各地で執り行われます慰霊行事への支援・参加等皆様を追悼する各種の事業を着実に進めて参りました。特に本年は、新しく二つの事業に着手致しました。その一つは、産経新聞に皆様のを追悼する活動を訴える広告の掲載を開始したことであります。第1回目は終戦記念日に掲載し、第2回目は10月25日の特攻記念日に掲載を予定いたしております。もう一つは、海軍予備学生14期の森丘哲四郎大尉の遺された膨大な日記を、御遺族の御好意を得て発刊の運びとなったことであります。森丘大尉は、昭和20年4月29日、特別攻撃隊第5七生隊員として、沖縄本島東北海上において散華された戦闘機操縦者であります。遺された日記は、入隊以降戦闘機操縦者としての訓練、日常の生活についてこまめに綴られたものです。ともすれば刊行者の思惑が入りがちなこの種の刊行物に比し、赤裸々な心情を知る1級の史料と考えております。今後ともこの種の貴重な資・史料の保存・刊行には、当顕彰会として、大いに努力をしていきたいと存じております。

戦後70年、我が国は、敗戦という極限状態から見事に復興・発展を成し遂げて参りました。偏に御英霊の皆様の戦友、同期、同輩の方々の懸命の努力によるものであります。本日もその一部の方々のご参列をいただいておりますが、この年代の方々への感謝の気持ちを表するとともに、戦火に斃れた皆様に、追悼の誠を長年にわたり尽くしてこられたことも忘れるわけには参りません。先程の森丘大尉日記の刊行に当たりまして、ハンモック仲間でありました同期の千玄室様から、ご高齢、ご多忙の中、ご丁重な寄稿文を頂きました。この一事を見ても、生き残った戦友の方々が如何に御英霊の皆様に思いを深く持っておられるかが明らかなところであります。後に続く私共も、御英霊の皆様への感謝、追悼の気持ちと、戦友の皆様がその後辿られた見事な半生を肝に銘じ、我が国の建設的な未来のため、今後ともこの慰霊顕彰事業に取り組んでいくことをお誓いして祭文と致します。

平成27年9月23日

公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会
理事長　杉山　蕃

御挨拶

第64回「特攻平和観音年次法要」の開催に当たり、御挨拶を申し上げます。

また、長い年月にわたり年次法要を支えてこられた関係者の皆様のご努力に敬意を表するものです。

さて、今年は終戦から70年の節目の年となりました。70年と言えば、人の生涯の大半の年月に近く、戦争体験者の皆様も高齢となりました。

私は、格別の感慨をもって戦後70年の秋の年次法要に臨んでいます。先の大戦で、若き青春の真っただ中に、国のためにと尊い生命を賭して散っていかれた方々に対し、ここに心からの哀悼の誠を捧げます。

この夏、特攻隊員でありながら、偶然に一命をとりとめた体験者のお話をテレビ番組でお聞きする機会がありました。想像を絶する厳しい戦況の中、次々と大空に飛び立っていったかつての戦友を思う言葉に胸が詰まる気持ちになりました。

こうして目を閉じて、その瞬間の苛烈な姿を思い描くとき、今の私どもには、言葉がありません。残された家族、親族の方々、戦場で苦楽を共にした方々のご心痛はいかばかりかと察する次第です。

今日の「戦後70年」にわたって続いてきた平和な社会は、尊い犠牲となられた方々のつくりあげていただいた礎の上に築かれてきたものと思います。かつての戦争を体験された方のお話を直接聞く時間は、次第に限られたものとなってきています。私は、「語り継ぐ」ということの重みを改めて感じています。直接体験のない世代の私たちが、心をひらいてお話をよく聞いて、次の世代に伝えることの役割を強く自覚していこうと考えています。

ご列席の皆様が末永くお元気で、これまでの貴重な体験談を子供たちの世代にお伝えいただくよう期待しております。

最後に、年次法要開催にご尽力されてきた皆様に感謝申し上げ、恒久平和への願いを込めて、御挨拶といたします。

平成27年9月23日

世田谷区長　保坂　展人

祭文奏上・杉山蕃理事長

御挨拶・保坂展人世田谷区長

和の礎」なのである。

やがて13時40分頃、旧小田原代官屋敷の門前、身代わり地蔵尊像と並んで建つ「特攻勇士之像」の碑前において、当観音寺の太田恵淳和尚による読経と駒繋神社の澤田浩治宮司による祝詞奏上が行われた。この像は、平成19年9月23日の第56回特攻平和観音年次法要に合わせて、当顕彰会から奉納、除幕・開眼供養が執り行われたものである。

次いで定刻14時、鍾楼での梵鍾三打で年次法要は始まった。打者航空自衛隊OB藤田信之会員、補助者青木義博会員の心を籠めた打鍾の音は、嫋々として世田谷山の森に谺し、参列者の心を洗う。

山主、神官ら特攻観音堂に入堂し、及川昌彦評議員の司会により粛々と法要は進められた。

参列者一同起立し、元海上自衛隊東京音楽隊員堀田和夫氏のトランペット伴奏により国歌斉唱。続いて堂内では、祭主世田谷山観音寺太田賢照山主による願文奏上が行われたが、太田山主は願文の中で、特攻烈士の遺徳を讃え、「特攻勇士の諸霊は正に忠烈の亀鑑なり。諸霊が父母の恩愛を断ち、大忠、大孝、大義、大勇に徹せし崇高無比な

る境涯に相到せんか誰か万斛の涙なきを得んや・・唯、諸霊を慰め得るもの一つあり、宇内に無慮一百三十有余の独立国家の新秩序の出現これなり。真に世紀の偉業。この赫然たるに匹儔するもの果たして他にあらんや。

これ正に諸霊の志の顕現なり。諸霊の血の発露なり。諸霊や、大仁にして大徳、大勇にして大善なり。故に諸士の霊徳や無量なり。諸士の光顔や巍々たり。諸士の威神や無極なり・・嗚呼尊い哉、嗚呼仰がんか哉、長存不滅の光。南無特攻平和観世音菩薩・・」と、言を極め、心魂を傾注して奏上された。真に特攻勇士は、護国の鬼神となって散華され、今や平和守護の観世音菩薩となって我ら衆生を見守っておられるのである。

梵鐘三打

献吟・吟　吉野一心、笛　逢坂龍信両氏

献歌・特攻慰霊顕彰会男性合唱団と共に
全員斉唱（トランペット　堀田和夫氏）

代わって、駒繋神社（注3）の澤田浩治宮司祭主となって神儀が執り行われ、修祓の儀・降神の儀・獻饌の儀・祝詞奏上・玉串奉奠等の式典が、厳かな神楽舞曲の流れる中、清らかに齋行された。玉串奉奠の儀は、先ず太田山主に始まり、当慰霊顕彰会と御遺族の各代表によって行われた。

次いで、堂前において、当慰霊顕彰会杉山蕃理事長による祭文奏上が行われた（祭文は別掲）が、その中で、終戦70年の節目の年に当たっての天皇、皇后両陛下のパラオ戦跡行幸啓や総理談話の発表に触れ、戦没者の慰霊顕彰と平和国家としての我が国の今後の展望の重要性を強調し、当慰霊顕彰会の業務の一端を報告すると共に、今後ともこの慰霊顕彰事業を着実に進めていくことをお誓い申し上げた。

続いて御来賓の保坂展人世田谷区長が挨拶に立たれ、別掲のように述べられて、英霊の御意志を受け継ぎ、恒久平和と福祉のために尽力することを誓われた。

次いで、一誠流・吉野一心氏の吟、逢坂龍信氏の龍笛による献吟が行われた。

続いて、堀田和夫氏のトランペット独奏による「鎮魂　同期の桜」が奉奏された後、当特攻慰霊顕彰会男性合唱団と共に参列者一同、堀田和夫氏のトランペット伴奏により、慰霊献歌「空の神兵」「若鷲の歌」「海ゆかば」の3曲を歌い上げたが、英霊たちもさぞ、御霊安らかに唱和されたものと拝察する。

次いで、奉納献奏として、旧陸海軍の軍装をした甲飛喇叭隊第11分隊（原知崇隊長）による国の鎮めのラッパ吹奏と弔銃斉射があったが、若く、きびきびとした挙動と共に、嚠喨として悲愁漂うラッパの響きに、懐旧の念一入なるものがあった。

終わって、当会代表・御来賓・御遺族を始め参列者一同祭壇前に進んで順次焼香を行った後、式衆一同退堂して池前に進み、池中に立ち給う「観世音菩薩・夢違い観音像」（注4）に向かい朗々と『般若波羅蜜多心経』の声明並びに神官による祝詞の奏上があって、滞りなく年次法要の幕を閉じた。

引き続き、15時30分から境内で直会が行われたが、初めに、御来賓代表として、今回初めて参列された前日本会議会長・元最高裁判所長官三好　達氏（海兵75期）の力強い御発声により、御英霊に対し献杯を行った後、各テントでは、参列者相寄り、約1時間、和やかに杯を交わして歓談し、それぞれ来年の再会を約して解散した。誠に身も心も清められた一日であった。

◇

（注1） 特攻平和観音年次法要は、昭和27年5月5日、東京都文京区音羽の護国寺において、旧陸海軍関係者を中心に二体の「特攻平和観音像」（海軍は「神風特攻平和観音像」と称していた。）の合同開眼法要が営まれたのを

第1回とし、以来64回目の年次法要ということであって、特攻平和観音奉戴以来満63年、特攻平和観音像制作以来64年の歳月が経過したことになる。

本像は、終戦後、静岡市の清水寺住職吉井成純僧正と日光山輪王寺塔頭華厳院住職関口直大僧正が、大東亜戦争全戦没者の霊魂成仏を発願し、法隆寺に願い出て秘仏「夢違観音像」を一尺八寸に縮小した像を制作し、平和観音像として奉戴することの許可を得、昭和25年10月10日に平和観音会を発足させ、会の趣旨に賛同する者にこれを頒布し回向することとしたが、現存が確認されているものは、本特攻観音堂の二体と、鳥濱トメさんによって知覧の特攻平和観音堂に奉安された一体、及び昭和21年から平成18年まで61回にわたり長年執り行われてきた海軍神風特別攻撃隊戦没者の慰霊法要「神風忌（しんぷうき）」が営まれていた東京都港区芝の増上寺塔頭安蓮社に奉安されている一体の計四体である。

陸海軍各一体の特攻平和観音像は、昭和26年5月、先代の太田睦賢僧正により開山された世田谷山観音寺境内に都下仙川に在った元華頂宮邸の持仏堂を移築、「特攻観音堂」とし、昭和31年5月18日に落慶法要を営んで以来毎年法要を行っており、護国寺での開眼法要以来通算して今年、第64回目の年次法要を斎行することとなった次第である。

なお、世田谷山観音寺では毎月の18日、特攻観音堂において、当慰霊顕彰会員を始め有志による月例法要を営んでいる。そして、大規模な年次法要は、毎年秋分の日の9月23日（又は22日）に営んでいるものである。

（注2） 神仏習合に関しては、平成21年11月発行の当会会報『特攻』第81号（2頁）に掲載したように、平成21年6月11日、高野山眞言宗総本山金剛峯寺金堂において、近畿7府県の有名151社寺でつくる「神仏霊場会」（現会長＝北河原公敬・東大寺長老）の主催で「神仏合同国家安泰世界平和祈願会（え）」が盛大に斎行されて以来、定例法要として年に1度、祈願会を催し、寺院と神社で交互に法要を営むことになったとのことであり、同会は、明治維新の際、神仏分離による廃仏毀釈運動の起こる以前は盛んであった、神仏を一緒に崇拝する精神風土を取り戻そうと、平成20年3月に設立され、世界平和運動の一環として、この運動を進めているとのことであり、この傾向は、今後ますます盛んになるものと思われる。

近年、関東においてもその運動は活発に行われており、平成25年には、伊勢神宮の第62回式年遷宮の年に当たり、また、神仏霊場会設立5周年でもあったところから、11月17日、上野の東京国立博物館・平成館において、同会主催により、「日本人の信仰・神と仏をめぐって」というテーマで、宗教学、神道、仏教の各界代表者による設立5周年記念シンポジウムが行われた。更にまた、今年は、高野山眞言宗総本山では、開創1200年記念の大法会が盛大に営まれているが、5月19日には、天台宗総本山・比叡山延暦寺の半田孝淳天台座主（97歳）を始めとする天台宗僧侶の一行が訪れ、祝いの言葉を述べる法会を、金剛峯寺金堂で営んだ。天台宗のトップである天台座主が、高野山眞言宗総本山で法会を営むのは、両宗派の開創以来初めてとのことである。平安時代に仏教を発展させた双璧とされる天台宗の開祖・最澄と高野山眞言宗の開祖・空海は、晩年に対立し、久しく交流が途絶えていたが、近年は良好な関係となっており、今回は、高野山眞言宗・総本山金剛峯寺の要望に応じ、半田天台座主ら一行

ラッパ献奏・甲飛喇叭隊第11分隊、隊長原知崇氏

弔銃斉射・同上

焼香・遺族　臼田智子理事

焼香・来賓　三好達前日本会議会長・元最高裁判所長官

池　前　祭

池中に立つ夢違い観音像

の高野山訪問となったものである。法会終了後、高野山眞言宗の添田隆昭宗務総長（68歳）は、「天台宗という良きライバルがあったからこそ、高野山も発展してこられた」と感謝の言葉を述べたとのことである。

なお、付言すれば、世田谷山観音寺の創建者である先代山主太田睦賢和尚は、青年の頃、明治41年に来日して草津に居を構え、癩（ハンセン氏）病療養所で奉仕活動を続けていたアメリカ人宣教師M・H・コンウォール・リー女史の献身的な行為に深い感銘を受けてキリスト教に帰依するようになり、女史の手で洗礼を受け、「ニコラス」というクリスチャン名を授けられた。

駒繋神社拝殿

そして、更に深くキリスト教を学ぼうとして海外留学を思い立ったところ、先々代から強く慰留され、得度することを要請されて、遂に翻意し、得度して睦賢を名乗り、仏教徒としての道を歩むことになった、しかし、得度後もキリスト教関係者との交流は変わりなく続けられたという。更にまた、睦賢和尚は、神官の資格も取り、戦時中は王子稲荷神社の禰宜として奉仕されたということである。そのような宗教に対する考え方、志向を現山主も継承しておられるのではないか、と筆者は拝察するのである。

（注３）「駒繋（こまつなぎ）神社」は世田谷山観音寺の北東約４００メートルの下馬４丁目に鎮座まします古社で、昔から付近一帯の鎮守様として尊崇されている。御祭神は大国主命、又の名を子（ね）の神、子の明神とも言い、五穀豊穣の神であるとともに、源氏ゆかりの武運の神でもある。その謂れは、現在の社名が示すとおり、古くは源頼義、義家父子が奥州征討に当たって武運を祈願され、その後、頼朝公もまた、藤原氏征討に際して、武運祈願のため参詣され、愛馬芦毛を社前の松に繋いだという故事に由来する（詳しくは、平成19年11月発行の当会会報『特攻』第73号４頁以下参照。なお、樹齢４００年以上と言われた境内の「駒繋の松」（五代目）の大木は、すっかり松食い虫に侵食されて枯死したため、昨年伐採され、現在、六代目の若木を生育中とのことである）。

駒繋神社境内入口　朱塗りの橋

（注４） 世田谷山観音寺境内の蓮池の中に立ち給う「観世音菩薩立像」は、法隆寺夢殿の「夢違い観音像」を模して拡大鋳造された菩薩像で、その胎内にも、特攻平和観音像の胎内に納められている特攻勇士の霊璽簿の写しが納められている。夢違い観音とは、悪い夢（二度と経験したくないこと、思い出したくないことなど）を良い夢に変えて下さる観音様と信仰されている。

（陸士61期・飯田正能記）

平成27年度全日本空挺同志会第60回高野山慰霊祭に参列して

評議員　飯田　正能

平成27年9月6日（日）、高野山奥の院に至る参道入口の、玉川に架かる「一の橋」近くの空挺落下傘部隊将兵の墓碑「空」の碑前において斎行された「全日本空挺同志会第60回高野山慰霊祭」に、当顕彰会の代表として、倉形桃代評議員と共に参列させていただいた。その前日の5日（土）に行われた奥の院見学ツアー並びに前夜祭でもある、全日本空挺同志会菩提寺「不動院」の宿坊で行われた「遺族を囲む夕食会」にも参加させていただいた。更に慰霊祭終了後、不動院において行われた全日本空挺同志会幹部等の昼食会にも参加させていただいた。

今年は終戦70年の節目の年であるとともに、高野山「空」の墓碑が昭和31年8月に建立され、第1回の慰霊祭が同年9月8日に斎行されて以来60回目という節目の年であり、更に、高野山開創1200年大法会の年という大節目の年でもあって、慰霊祭参列者は、400名を超える大盛況であった。そのため、宿泊所も、不動院のほか、近くの上池院及び光明院の3宿坊が当てられ、我々は、準別格本山光明院という後白河法皇の皇子八条宮円恵法親王ゆかりの古刹に泊めていただくことができた。

「空」の墓碑建立に当たっては、旧陸軍挺進部隊戦友会有志の浄財もあったが、建立費の大半は、建立を主導した挺進第三聯隊所属、比島生き残りの中村軍医中尉と同中尉の婿入り先の義父によって支弁されたということである。そして、同墓碑には初めに、宮崎県の川南村にある川南護国神社から御霊を分祀したが、昭和38年に、建墓第一の功労者である中村軍医中尉が逝去された際、世話人一同衆議一決して同中尉の分骨が納骨された。このことが発端となって、旧陸軍挺進部隊の戦没者のみならず、その志を継いだ自衛隊空挺部隊の殉職者の分骨も、その御遺族の申出によって、この霊地高野山の「空」の墓に納骨されることとなり、今日に及んでいる、とのことである。

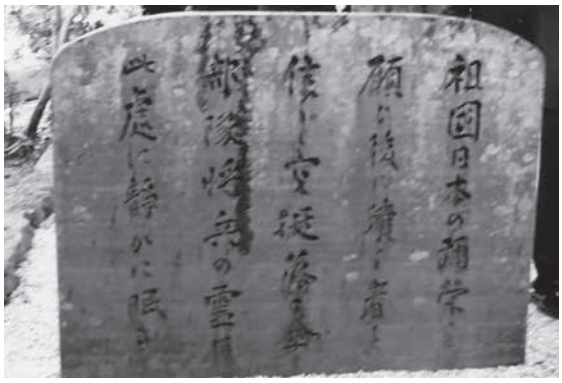
因みに全日本空挺同志会は、昭和36年5月に設立されたが、挺身赴難の精神と精鋭無比の誇りは、旧陸軍挺進部隊以来、戦後昭和29年福岡県香椎の旧米軍キャンプで産声を上げた自衛隊空挺団に脈々として受け継がれ、戦没者並びに殉職者の慰霊・顕彰は絶えることなく続けられており、空挺団の精神的基盤となっている。

この墓碑の主碑に刻まれた「空」の文字は、弘法大師・空海の真蹟として名高い、灌頂記（灌頂とは、諸仏の智水を頂に注ぐ儀式、密教で阿闍梨より法を受ける時の儀式を言う。）の中にある文字を拡大して彫ったものであり、空挺の空、己を空しうして国に殉じた将兵のこよなく愛した空である。

この慰霊祭は、伝統的に、各宿坊の寺院における早朝の勤行から始まる。そして、朝食後、本同志会の菩提寺である不動院前に全員9時に集合し、その門前から一の橋「空」の墓碑まで、音楽隊を先頭に、日章旗や本部・支部の隊旗を掲げ、新合祀者の御遺骨を胸

慰霊祭・祭壇

弘法大師・空海の真蹟「空」の文字の刻まれた主碑



副碑・空挺落下傘部隊の霊碑

に抱いた御遺族並びに既合祀者の御遺族、会長、支部長、来賓、会員、現職隊員、一般参加者が隊列を組み、音楽隊の演奏に合わせて整斉と慰霊行進を行う。この行進は、地元の名物行事ともなっており、参道に迎える善男・善女の姿も多く見受けられる。当日は、生憎の雨模様となったが、小雨決行もその伝統となっており、４００余名の行進はさすがに圧巻である。

慰霊祭会場は、前日から近畿連合支部の会員、特に高野山委員会の委員を中心に、会員並びに現職隊員らによって祭壇、大天幕を始め、入念な準備がなされていた。「空」の墓碑の後ろには、落下傘を象った赤、白、緑三色の幕が張られ、墓碑前には、旧軍と自衛隊の落下傘が祀られている。墓碑の左右の供花といい、祭壇といい、実に立派な心の籠った祭場である。また、本慰霊祭の企画・主宰は同志会本部で行われているが、現地委員らとの緊密な連携の上、細部にわたって心配りがなされており、真に心地の良い運営振りに感心させられた。

慰霊祭は、定刻9時30分、執行委員伊丹理事長の開祭の辞により始められた。先ず碑前の灯籠と祭壇の灯明に点火・献灯され、参列者全員起立し、音楽隊の演奏裡に国旗掲揚並びに国歌斉唱が行われ、御霊に黙祷を捧げた。

次いで、御導師・高野山不動院山階清隆住職始め同寺僧侶の入場、祭儀・読経が行われた後、島田幸治本部事務局長から新合祀者10柱の紹介があり、各御遺族から御遺骨が高野山委員に手渡され、碑前に安置された。暫し御霊鎮めの読経の後、祭主・衣笠陽雄全日本空挺同志会会長の祭文奉読がなされた。同会長は、祭文の中で、終戦70年の節目の年に当たり、戦後70年間絶やすことなく守り続けてきた空挺同志の戦没者並びに殉職者慰霊の灯火を今後も永久に守護し続ける決意を述べるとともに、御霊の追悼に留まらず、その勲しを顕彰し続けることこそ我々の大切な責務であると強調された。

続いて、第1空挺団長兼習志野駐屯地司令児玉恭幸陸将補の心温まる追悼の辞が述べられたが、その中で第1空挺団は周辺事態への即応態勢を強化するための編成改正を進めており、また、米軍との共同訓練をアラスカで行うなど連携を強めている、との報告がなされた。

次いで、近畿連合支部会員安積和也氏による詩吟の献詠が行われた後、高野山委員の手によって御遺骨が墓碑内に納められた。続いて、御導師らの読経の内に順次、指名焼香並びに一般焼香が行われ、祭儀は滞りなく終了して御導師ら退場となった。

その後、祭電披露があり、新合祀の御遺族を代表して、故清兼徳明様の御長男清兼利明様からお礼の御挨拶があった。

続いて、全員起立して、音楽隊の伴奏により、「空の神兵」を高唱した。その声は、鬱蒼たる参道の杉並木に谺し、彼方の空へと響き渡った。

やがて国旗が降下され、閉会の挨拶となったが、その後、長年の御奉仕に感謝し、不動院と高野山委員会に対し衣笠会長から感謝状が贈呈された。

その後碑前において、奉納拳法と銃剣道が披露され、更に落下傘の開傘展示が行われたが、いずれも裂帛の気合の込もった素晴らしい演技であった。

最後は、高野山委員会委員長による「空」の碑建墓の歴史と慰霊祭の経緯が縷々紹介されて、11時45分、慰霊祭行事は悉く終了した。誠に感動一入の慰霊祭であった。

終わって、空挺同志会の幹部ほか有志が不動院の広間に集まって、昼食会

不動院前を出発した慰霊行進

「空」の墓碑入口での音楽隊吹奏

「空」の墓碑前での御遺族記念撮影

「空挺落下傘部隊将兵之墓」の墓標

落下傘装着・開傘展示

全日本空挺同志会近畿支部の大旗

不動院入口「空挺落下傘部隊」の標柱

昼食会における衣笠会長挨拶

遺族を囲む懇親会（前夜祭）における衣笠会長挨拶

金剛峯寺・根本大塔

奥之院御廟所・燈籠堂

金剛峯寺・金堂

東日本大震災物故者慰霊碑（奥之院）

大東亜戦争無縁戦士之墓（奥之院）

が開催されたが、その席上求められて筆者も御挨拶を申し上げたが、特に、高野山総本山と旧陸軍士官学校との縁に関して、高野山真言宗管長・総本山金剛峯寺庵主を務められ、戦没者の慰霊に心血を注がれた陸士55期の大先輩資延敏雄大僧正とその御薫陶を受けられた筆者の同期生（陸士61期）・高野山真言宗群馬宗務支所別格本山高崎白衣大観音慈眼院山主・先の総本山金剛峯寺執行・高野山東京別院主監高野真言宗宿老・故橋爪良恒権大僧正の事蹟を紹介したところ、当不動院住職山階清隆大和尚も、資延敏雄大僧正の下で約4年間修行を積まれたとのこと、真に奇しき縁に一驚を喫した次第である。

なお又、前夜、光明院にて同宿した小谷野氏（自衛隊を退職して10数年前から僧職にある方）は、空挺団創設期に、福岡県香椎の旧米軍キャンプにおいて、米陸軍空挺隊の教育を受けたとのこと、同キャンプは、戦前の九州飛行機株式会社（最後の新鋭戦闘機・前翼型超重装備戦闘機「震電」の試作機を完成した）の工場及び飛行場のあったところで、筆者が陸士から復員後、米軍の要請により、多くの労務者と共に、急造の米軍宿舎（いわゆる蒲鉾兵舎）と補給廠（Q. M.）を建造したところであり、懐かしさの余り、大いに意気投合して語り合うことができた。

なお、筆者らは、慰霊祭諸行事終了後、折から開創１２００年大法会の執り行われている高野山真言宗総本山「金剛峯寺」に参詣し、真言密教の根本道場「根本大塔」他を拝観した後、次の巡拝地・吉野山を目指して高野山を後にした。

第48回戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭に参列して

評議員　石井　千春

平成27年4月7日、第48回戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭が、徳之島伊仙町犬田布岬において執り行われた。

岬から望む海は、強風のため三角波が立ち、空は雲が低く垂れ込めていた。午後1時30分、慰霊塔の前に参列者約300名が着席。ご遺族は4名とその家族である。

海上自衛隊鹿屋基地からP－3Cが慰霊飛行し、天城町の樟南第二高校吹奏楽部が「春の道を歩こう」などの楽曲を奉納演奏し、鎮魂の舞「ああ、犬田布岬」を西犬田布岬婦人会の方々が舞った。

1時55分、一同拝礼、祭典が開始した。国旗、軍艦旗掲揚。

修祓の儀、降神の儀を義名山神社岡本宗道宮司が執り行い、祝詞が奏上された。

祭文を正友哉隊友会会長が奏上された。

「謹んで三七三七柱の第二艦隊海上特攻戦没諸英霊に申し上げます。

想えば昭和二十年四月、祖国防衛最後の砦とも言うべき沖縄に来攻した敵を撃滅すべく一億総特攻の魁として沖縄西方海面突入を目指し、伊藤第二艦隊司令長官指揮の下、内海を出撃した艦隊旗艦大和以下、戦隊旗艦矢矧、第十七駆逐隊磯風、浜風、雪風、第四十一駆逐隊冬風、涼風及び第二十一駆逐隊朝霜、霞、初霜の第二水雷戦隊から成る第一遊撃部隊は、七十年前の四月七日の正午過ぎ、大隈海峡の西方海面で数百の敵艦載機を迎え撃って勇戦力闘も空しく、数刻後、大和、矢矧、朝霜、浜風、磯風、霞の六艦を失い、御霊はここ犬田布岬沖に水漬く屍と散華されました。

本作戦は、海陸空の総力を結集、菊水攻撃作戦の一環として行われた征って還らぬ特攻作戦で、その成功は万に一つの賭けであり、むしろ、その成果を将来に期して『光輝アル帝国海軍海上部隊ノ伝統ヲ発揚スルト共ニソノ栄光ヲ後世ニ伝ヘ』『皇国無窮ノ礎ヲ確立』するところに真のねらいがありました。伊藤長官以下八千の艦隊将兵はよくこの作戦の主旨を体し、『皇国ノ隆替此ノ一挙ニ存ス』と覚悟を定め斉整と出撃して行ったのであります。

敵機動部隊の攻撃を一手に引き受けての勇戦力闘は、同時に敢行された菊水航空総攻撃の戦果の発揚に貢献しましたが、突入作戦は中止のやむなきに至り、戦勢を挽回することができないまま沖縄は陥ち、『万世ノ為ニ太平ヲ開ク』との大詔を拝して日本は終に連合国の軍門に降りました。

敗れはしましたが、『皇国無窮ノ礎ヲ確立』すべく一死国に殉じた英霊の悲願は、日本の再生という形で実現しました。戦後日本の発展と平和は、英霊のご加護の下、苦難を乗り越えてきた国民の努力の結果であります。

英霊への感謝を忘れずに今後とも努力して参ります。（要旨）」

午後2時45分、一同黙祷。大和沈没の時刻である。

ご遺族代表月本陽蔵氏の挨拶の後、大久保明伊仙町町長が慰霊のことばを述べられた。次いで、藤田幸生当顕彰会副理事長が以下のように挨拶をされた。

「我が国周辺は、大陸の軍備拡張、半島の核やミサイルの保有、領土問題等、困難な環境下にある。戦後70年、戦争のない平穏な日々を過ごし得たのは、国民の努力の賜物であるのみならず、幸運に恵まれた面もある。しかし、その一番の理由は何かと、海上自衛隊に奉職してきた経験から想うとき、祖国防衛に殉じた英霊への感謝の気持ちで一杯になる・・・。」

御霊に対し、「皆様」と呼びかけながら以下のように藤田副理事長は、続けられた。

「世界の海軍は、海上自衛隊を通して日本という国を畏敬の念を持って見てくれております。その理由は、皆様方の先の大戦での戦い振りにあると申しておりました。正に昔、弁慶が仁王立ちで義経を護ったように、70年後の今でも、日本を守り続けて下さっているということです。今ここでこのことを申し上げ、感謝の言葉を捧げたいと思います。」

参列者の玉串拝礼、献花の後、浦安の舞、昇神の儀が執り行われた。気が付くと風は止み、海は穏やかになっていた。

国旗、軍艦旗が降下されて、慰霊祭は終わった。

◇

大和特攻戦没将兵の慰霊塔建立の地に徳之島犬田布岬が選ばれた理由の一つは、吉田満著『戦艦大和ノ最期』に、大和轟沈は「徳之島ノ北西二百浬ノ洋上」と記されているからである（伊仙町歴史民族資料館元館長四本延宏氏談）。

『戦艦大和ノ最期』は、副電測士として大和に乗艦した学徒兵の著者が、

その出撃から沈没までの経緯を克明に記した手記である。初稿は終戦直後に殆ど一日で書き上げたという。大和と共に没した約3千の御霊の声が著者に書かしめたと言ってよい迫真の戦闘記録である。無謀な水上特攻出撃の意義を見出そうと苦悩する青年士官の姿を描き、多くの問いを読者に投げ掛けてもいる。

学徒出身士官と兵学校出身士官の間で、負け戦に命を賭ける意義を巡って激しい論争がガンルームで起こった。皇国のために一身を捧げる、これ以上の意義はない、と兵学校出身の少尉、中尉は口を揃えて言った。確かにそうだ、しかし、それ以上のもっと普遍的な意義を見出したい、自分の死、祖国の敗北、これら一切のことに一体、どんな意義があるのか、何故日本は敗れなくてはならないのか、色をなしてこう反論する学徒出身士官に、修正の鉄拳が飛び、乱闘の修羅場となる。この争いを収めたのは、少、中尉のまとめ役、ケップガンの臼淵磐大尉だった。薄暮の洋上に眼鏡を向けたまま、彼は低く囁くように言った。

「進歩ノナイ者ハ決シテ勝タナイ
負ケテ目ザメルコトガ最上ノ道ダ
日本ハ進歩トイウコトヲ軽ンジ過ギタ　私的ナ潔癖ヤ徳義ニコダワッテ、本当ノ進歩ヲ忘レテヰタ　敗レテ目覚メル、ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ハレルカ　今目覚メズシテイツ救ハレルカ　俺タチハソノ先導ニナルノダ　日本ノ新生ニサキガケテ散ル　マサニ本望ヂヤナイカ」

臼淵大尉のこの持論に反駁を加える者はなく、ガンルームに沸騰した死生談議の一応の結論となった。

臼淵大尉は昭和17年11月卒業の海兵71期であり、同期には、回天特攻の仁科関夫中尉、桜花特攻の三橋謙太郎大尉を始め、同期の戦死者は卒業生581名中331名を数える。

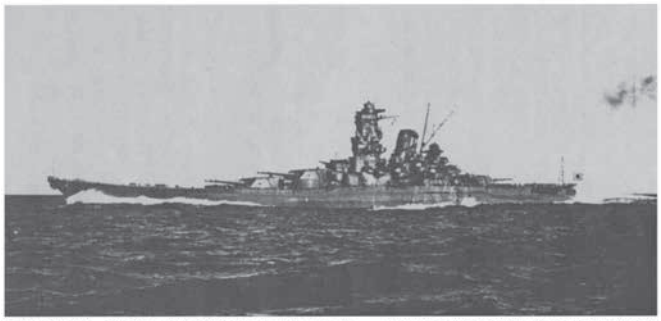
帝国海軍の栄光の象徴であった大和の沈没は、一つの歴史の終焉を意味した。

「徳之島ノ西北二百浬ノ洋上、「大和」轟沈シテ巨体四裂ス　水深四百三十米
今ナホ埋没スル三千ノ骸（ムクロ）
彼ラ終焉ノ胸中果シテ如何」

『戦艦大和ノ最期』は、このように終わっている。

慰霊塔

可憐な巫女の浦安の舞



昭和16年10月30日、宿毛湾沖爆柱間で全力公試運転中の大和（その３）――ワシントン海軍軍縮条約による海軍休日の期限終了を迎えて、日本海軍が建造した戦艦大和型のネーム・シップである。史上最大の艦砲である45口径46センチ砲を９門搭載、同砲弾に対する十分な防御を備え、速力27ノットを発揮、基準排水量は64,000トンに達し、人類がつくりあげた最大、最強の戦艦であった。なお、この時の状態は69,304トン、151,700軸馬力、27.3ノットである。

（注・上掲の写真は潮書房1981.6.15発行「丸スペシャルNo.52戦艦大和・武蔵」より）

追悼・陸軍特攻第23振武隊隊長・伍井芳夫大尉

元朝日ヘリコプター社長
森田　正

昭和20年3月26日、沖縄南西の慶良間諸島に接近した米第5艦隊司令長官スプルーアンス大将率いる艦船1317隻は、沖縄を取り巻き、4月1日、圧倒的な大兵力をもって沖縄本島西岸北・中飛行場正面に上陸を開始した。

これに対し、九州の鹿屋に司令部を置く海軍第5航空艦隊（司令長官宇垣纏中将）は、陸軍第6航空軍（軍司令官菅原道大中将）と共に、菊水作戦など全力を挙げて特攻攻撃を実施し、九州の各基地から次々に特攻機が沖縄を目指して発進した。

知覧基地発進の先陣を切ったのは、伍井芳夫大尉率いる第23振武隊（九九式襲撃機装備）12名であった。

隊長　伍井芳夫大尉
隊員　前田　啓少尉　塩島清一少尉
松田　豊少尉　谷山正夫少尉
柴本勝美少尉　岡本龍一准尉
金子龍雄准尉　大橋治男曹長
藤野正行曹長　豊崎儀治軍曹
清水保三軍曹

そして、伍井隊長以下4名は4月1日、慶良間列島南方洋上で、前田少尉以下5名は2日後の4月3日、沖縄周辺洋上で、それぞれ米艦船に特攻攻撃を敢行して散華された。他の3名は、搭乗機のエンジントラブル等により出撃不能となった。

知覧基地の通信室には、上級士官が集まって戦果を心待ちにしていると、伍井隊長機から「バージニア（注・戦艦ウェストバージニア）発見、我突入ス」との電信を受信した。その時、電信室内では、万歳、万歳の歓呼の声が爆発したという。

伍井隊長が戦死された時、妻・園子26歳、長女・満智子3歳10ヵ月、次女・智子1歳7ヵ月、長男芳則5ヵ月の4人の遺族が残された。

当時、特攻隊員として散華された戦死者は、「軍神」と呼称され、社会的評価が高かった。特に戦死は軍人として、日本臣民の最高の栄誉であった。したがって、遺族はその戦死を嘆き悲しむことなく、我が家の誉れと思わなければならない時代であった。

このような社会的風潮から、遺族は涙を流したり、泣いたりせず、戦死を誇りに思い、毅然とした態度を要求されていた。

妻・園子が夫の戦死を知ったのは、4月3日の朝、ラジオの戦況ニュースであった。「4月1日早朝、手に桜の花を持ち、第23振武隊長伍井大尉以下何名出撃す」と報じた。そして、沖縄海域において敵艦隊に突入した、とニュースは繰り返し報道していた。

余りにも早い出撃であった。夫は永遠に帰らない。3月25日の帰宅が今生の別れとなった。この日夫は、勤務地の栃木県壬生飛行隊から埼玉県桶川町（現・桶川市）の自宅に最後の別れのため帰宅した。そして、3人の子供の一人一人に声を掛け、抱き締めた。そして、別離に際して用意していた爪と髪の毛が遺品として残された。

2日後の3月27日午前8時30分、予告どおり、栃木県壬生飛行場を離陸した夫の操縦する特攻機は、家族や肉親の待つ桶川の自宅の上空を2回旋回し、翼を振りながら別れを告げ、知覧基地を目指して、西の空へ消えて行った。出撃する者も見送る者も地獄を見る思いであった。同年7月、長男は亡き父の後を追うように病没した。僅か8ヵ月余のはかない命であった。

戦後、妻・園子は、2人の幼い娘を抱えて、自立の道を選択した。昭和21年4月から33年間に及ぶ教員生活を無欠勤で通し、昭和54年3月、桶川北小学校長を最後に定年退職した。

威風堂々とした存在感のある厳しい先生であったと言われている。晩年は桶川市遺族会婦人部長として活躍するなど、多くの人達との交流に恵まれ、昭和62年3月、享年68歳で夫の待つ天国へ旅だった。

亡母の意志を継承した次女・智子は現在、埼玉県遺族連合会理事、桶川遺族連合会会長、旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会会長として活躍している。

今年7月13日（月）、沖縄戦で散華された伍井芳夫隊長の次女・臼田智子さんを伴って、故人が最後の特攻訓練に従事した千葉県の下志津教導飛行師団（現・陸上自衛隊高射学校）を訪問した。地元の友人・佐久間弘文氏が事前に現地の調整を行ってくれて実現したものである。

訪問先では、総務部広報室の実方武氏が、「広報史料館」を案内してくださり、懇切丁寧に説明された。

館内には、下志津陸軍飛行学校の歴史、特攻隊（当時の新聞、出撃者の遺書、遺品、写真、硫黄島の現地で収集された遺品等）、軍装（軍服、飛行服、愛国婦人会のタスキ、千人針、現在の軍装等）、刀剣・銃器、整備用具・整備部品、高射砲関係用具、模型飛行用具などの各コーナーに展示品が所狭しと飾られている。

臼田智子さんは、特攻隊コーナーで眼前に展示されている第23振武隊伍井

芳夫隊長を中心に居並ぶ12名の出陣写真に釘付けになり、しばし瞠目されていた。

戦争と平和に関する万感の思いが胸中を去来し、有意義な1日となった。

【参考資料】

陸上自衛隊高射学校作成の研究資料「下志津原」より抜粋

(3) 大東亜戦争末期の下志津陸軍飛行学校

以後下志津陸軍飛行学校は、終戦まで主として航空偵察の教育を行っていた。しかし大東亜戦争末期の昭和十九年六月には、平時編成における下志津陸軍飛行学校を閉鎖し、下志津教導飛行師団を編成して戦力化された。

その編成の概要は、師団司令部（下志津）、戦闘機を主体とする第一飛行戦隊（銚子）、一〇〇司偵を主力とする第二飛行隊（八街）、九九軍偵を主力とする第三飛行隊（下志津）、及び材料廠、写真隊、通信隊（いずれも下志津）であった。

下志津教導飛行師団は、当初、偵察を本務としており、サイパン、硫黄島その他の偵察、とりわけ夜間飛行による写真偵察で写真判読を行い、敵情判断には相当な貢献をしたが、戦局が急を告げるに従い、特攻作戦の一部を分担することとなった。

当時下志津飛行師団長であった片倉衷中将著『インパール作戦秘史・陸軍崩壊の内側』には、下志津における特攻出撃に関し記述されているが、その要約を記しておく。

「私は下志津飛行隊を『先知飛行隊』と呼称するように示達した。（中略）また千葉の並木寮に合宿してこれを先知寮と呼称し、偵察部隊の本領発揮に邁進せしめた。当時、私の部隊長就任前、石腸隊高石大尉等十八機は既に出動していたが、飛行師団司令部附在勤中八紘隊の進襲隊福島大尉以下十二機は、十二月十五日午後、銚子飛行場を発して特攻任務についた。爾来、特攻機の志願者を募り、私は師団長として、とくに彼らに、『諸子は生きながら既に護国の神である。従って諸子平素の訓練、起居はことごとく、士兵の範たるべく、また使用機も私は、当初から修ばつして清浄なものとしてこれを充用する。諸子の攻撃精神は私をして言わしむれば、天皇精神の爆砕となって、敵艦轟沈の任処に就くものである』と激励した。

こうして三月二日には第二十三振武隊伍井大尉、前田・塩島・柴本・松田・谷山各少尉、岡本准尉、金子・大橋・藤野各曹長、豊崎軍曹、清水伍長の十二機を、銚子から出発せしめた。

（中略）

三月二十八日二三・三〇分、在知覧飛行場発の伍井大尉からの来信は次の如くであった。

『吾等出陣に際して、大変お世話に相成りました。明二十九日出撃であります。昨二十七日、壬生を十五機出発、小田原に一機不時着せしめ申訳ありません。豊崎軍曹は予備機で本二十八日加古川から追及しました。大橋曹長は故障のため、浜松飛行場に不時着未だ到着せず。本二十八日、一四三〇、十一名集結、至極元気旺盛、明日の出撃を待っております。閣下の御訓示に基き、立派に死にます。大義に生きます。閣下並びに将兵各位の御武運長久を御祈り致します。』

なお伍井大尉は出陣に際し『振武之雄叫』として私に贈り『栄え行く御国は刀、振武はつばとなりて醜敵打滅さむ哉』の三十一字と刀の鍔を添えた。

と号第三十六、三十七、三十八の各特攻隊は、前橋、壬生各飛行場を訓練飛行場として訓練し、三月二十日前橋飛行場からの発進となった。

第三十六飛行隊は住田・北村・片山・高島各少尉、小川・下手各曹長、嶽山・森各軍曹、貴志・岡部・峰・細木各伍長である。第三十七飛行隊は林・柏木・春島・佐々木各少尉、高橋・田窪各曹長、水畑・石川各軍曹、松井・安倍・原田・崎田各伍長であった。

（中略）

当時既に硫黄島玉砕の悲報が入手された。

三月二十九日、我が師団は第六十二振武隊白梅隊を一六・〇〇出陣せしめた。出陣式は下志津飛行師団で行い、全師団でこれを送った。特攻隊員は石川中尉、坂本・込茶・鈴木・滝口・杉田・冨沢の各少尉、倉曹長、木谷・三宅各軍曹、庭・坂本各伍長の十二機である。

私は特に訓示して、神州既にきょう敵に冒され、ちょうど元侵寇時の対馬の一戦に似ている。決戦指導の主動性は必死必中体当り戦法を中核とする航空作戦の成果にかかっていることを述べ、その奮闘を祈念した。

全師団の将兵粛として声を発する者もない。第六十二振武隊の出陣は、神儀及び出陣式を下志津で挙行して、しかも使用機は軍偵察機または司偵機であった。」

このように下志津陸軍飛行学校は、特攻基地として我が国防衛の第一線に加わっていた。しかし戦力化されたとはいいながら、学校としての機能も果たしており、学生教育は懸命に行われ

ていた。

前記片倉将軍の書によると、昭和二十年の一月から四月までの僅か四カ月の間に、六回の訓練事故で十一名が死亡している。戦時中の猛訓練が要求された時代とはいえ、安全管理のやかましい現在では考えられぬほどの事故である。

昭和二十年に入ると戦局は極度に悪化し、千葉市周辺の軍事施設も度重なる空襲を受け、大損害を受けた。下志津飛行場も幾度か空襲を受けた。特に五月八日のグラマン二十数機による銃撃と、七月七日の千葉大空襲の際の二十五機による焼夷弾攻撃は、激烈なものであったという。しかし滑走路や誘導路周辺に掩体壕や防空壕を掘り航空機を隠蔽していたので、機体や人員にはほとんど損害がなかった。

その後終戦間際になり、兵力温存と本土決戦に備えて、飛行師団の下志津衛戍部隊の約半数は、群馬県の壬生飛行場に移駐した。

こうして下志津飛行場は、空襲の割りには被害も少なく、学校本部をはじめ多くの施設が無傷のまま終戦を迎えたのであった。

下志津教導飛行師団より出撃の特攻機

（隊　名）	（出発期日）	（出発地）	（隊員数）	（隊　長）	（留守担当者）
進　襲　隊	昭19.12.15	銚　子	12	大尉　福島弘人（広島県）	父　福島林太郎
第23振武隊	昭20. 3. 2	銚　子	12	大尉　伍井芳夫（埼玉県）	妻　伍井周子
と号第36飛行部隊	昭20. 3.20	前　橋	12	少尉　生田乾太郎（愛知県）	母　生田信子
と号第37飛行部隊	昭20. 3.20	前　橋	12	少尉　小林敏夫（茨城県）	父　小林六之助
と号第38飛行部隊	昭20. 3.20	前　橋	12	少尉　小野生三（大分県）	兄　小野圭二
第62振武隊白梅隊	昭20. 3.29	前　橋	12	中尉　石川一彦（香川県）	妻　石川フサエ
特別攻撃隊石腸隊	？	？	18	大尉　高石邦雄（福岡県）	母　高石スズ

伍井芳夫隊長の次女臼田智子さん（中央）
（以上写真はいずれも陸自下志津高射学校「広報史料館」で撮影）

戦艦ウェストバージニア発見我突入ス！

―特攻隊第23振武隊長伍井芳夫―

元朝日ヘリコプター社長
森田　正

（編注・本稿は、「ヘリコプタージャパン」平成18年8月号に「ヘリにまつわる私記」として掲載されたものであるが、ご了承を得て転載させていただいた。なお、一部、前掲の論稿と重複するところがあるが、そのまま掲載させていただいたので、ご了承下さい。原文は横書きである。）

◇

1　特攻の町・知覧町

終戦後、61年目の夏が巡ってきた。

鹿児島県知覧町は、南東に秀麗な開聞岳を望む「陸軍特攻隊」の基地として、最も有名な戦跡の一つである。

昭和16年12月、大刀洗陸軍飛行学校知覧分教所として開校したこの地は、3年後に、痛恨無比の特攻基地と化した。

昭和20年4月1日、第23振武隊を嚆矢とする知覧出陣の総数485名の若者が「特攻隊員」として、爆弾搭載の航空機もろとも肉弾となって敵艦に突入し、沖縄海域で散華している。

昭和30年に、隊員が壮途についた思い出深いこの地に、若人の至純の霊の永久に安らかならんことを祈念し、「特攻平和観音」が祀られた。

続いて、昭和49年には平和の守護神として特攻銅像「とこしえに」が建立された。

また、昭和50年に「遺品館（後に特攻平和会館と改称され新築）」が開館し、特攻隊員の遺影、遺品、絶筆などが展示されて、訪れる人達に平和の尊さを改めて思い起こさせている。

さらに、61年に「とこしえに母と共にやすらかに」の願いをこめて「母の像」が建立された。

そして知覧は今、銘茶の産地として田園風景を呈し、平和な町に復帰している。

この地を舞台に戦後生き残った特攻隊員の友情や夫婦愛を描いた東映映画「ホタル」（監督・降旗康男、主演・高倉健、田中裕子）が封切られたのは、平成13年5月で、名作映画として多くの観客を動員した。

また、この映画にも登場し、隊員をわが子のように面倒を見、心の支えとなった「知覧の母（別名・特攻おばさん）」と呼称された鳥濱トメさんも南溟に散華した若者の後を追うようにして今は故人となられている。

2　航空特別攻撃隊の誕生

昭和19年の夏以降、日本の絶対防衛圏にあたる諸海域は米軍の蹂躙するところとなり、日本本土の南方資源地帯との交通路は、まさに切断寸前という状態になった。

そうした情勢下での10月17日、米軍はレイテ湾口のスルアン島に上陸を開始、ここに米軍のフィリピン攻略意図が明確となるや、翌18日、大本営は、「レイテ湾に来攻した敵主力に対し、空、海のみならず地上軍をも指向し、ここに国軍の総決戦を求める」との方針を打ち出した。世に言う「捷1号作戦」の発動である。

10月24日、日本海軍はシブヤン海で戦艦武蔵を失うなど、国運を賭けたフィリピン沖海戦は満身創痍に終わった。

先陣を切った海軍の「神風特別攻撃隊・敷島隊」（隊長・関行男大尉）は索敵を続けていたが、10月25日マバラカットを発進した5機がアメリカ航空母艦数隻に突入し、これを撃沈するなど多大な戦果を挙げた。

海軍に続いて陸軍でも、航空機に爆弾を搭載して搭乗員もろとも敵艦に体当たりする特別攻撃隊が正式に編成されたのは、昭和19年10月下旬であった。

既にこの月17日、マッカーサーに率いられた米軍はフィリピンのレイテ島に上陸、「捷1号作戦」を発動した日本陸海軍との間に、南の空と海と島で悽惨な死闘が繰り返されていた。

圧倒的に優勢な米軍に立ち向かうため、全ての面で劣勢に立たされた日本軍は、世界戦史に類例のない文字通り必死の戦法である特別攻撃に最後の望みを賭けたのである。

こうして陸軍最初の特攻隊として、茨城県の鉾田教導飛行師団（師団長・今西六郎少将）と浜松教導飛行師団（師団長・川上清志少将）で、それぞれ九九式双発軽爆と四式重爆による2組の特攻隊が編成された。

そして10月末に戦雲けわしいフィリピン基地に進出、万朶隊（鉾田）、富嶽隊（浜松）と名付けられた両隊によって、米艦隊へ体当たり攻撃が開始された。

爾来、昭和20年8月15日の終戦まで1400人に及ぶ陸軍特別攻撃隊員が若い生命を海と空の果てに散らしたのである。

陸軍においては内地では、知覧、万世、都城などの南九州の飛行場が沖縄への出撃基地になり、これらの基地から出撃した特攻隊は「振武特別攻撃隊」と命名されている。

また台湾から沖縄に向けて飛び立った特攻隊は「誠特別攻撃隊」、本土防衛戦において米軍爆撃機B－29への体当たりを目的として組織された特攻隊は「震天特別攻撃隊」と呼称され、沖縄戦だけで陸海軍あわせて約3000機の特攻機が出撃したと言われている。

昭和20年3月26日、沖縄南西の慶良間諸島へ上陸した米第5艦隊司令長官スプールアンス大将の率いる艦船1317隻は沖縄を取り巻き、4月1日、圧倒的な兵力をもって沖縄本島西岸、北、中飛行場正面に上陸を開始した。

これに対し、九州・鹿屋に司令部をおく第五航空艦隊（宇垣纏中将）は陸軍の第六航空軍（菅原道大中将）と共に、菊水作戦など全力特攻攻撃を実施し、九州の各基地から次々に特攻機が沖縄を目指して発進した。

3　第23振武隊、知覧基地を発進

知覧基地発進の先陣を切ったのは、伍井芳夫（いついよしお）大尉率いる第23振武隊12名であった。

隊長　伍井　芳夫（大尉）
隊員　前田　啓（少尉）
　　塩島　清一（少尉）
　　松田　豊（少尉）

谷山　正夫（少尉）
柴本　勝美（少尉）
岡本　龍一（准尉）
金子　龍雄（准尉）
大橋　治男（曹長）
藤野　正行（曹長）
豊崎　儀治（軍曹）
清水　保三（軍曹）

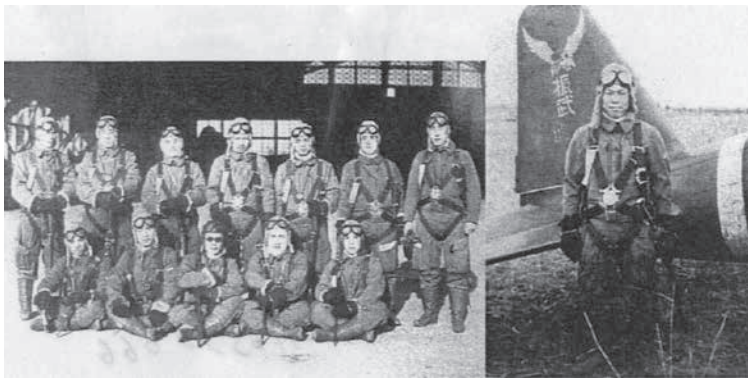
4月1日、第一出撃は伍井隊長のほか岡本、金子、大橋、藤野、清水のベテラン級6人と決定したが、清水機が直前になってエンジン不調。午後3時伍井隊長は残り4機を率いて沖縄・慶良間列島を目指して出撃した。

途中でエンジントラブルが続出し、岡本機が徳之島飛行場に不時着したほか金子、大橋、藤野の3機も知覧に立ち帰ったため、伍井隊長が沖縄海域で単機突入した。その模様は後述する。

金子准尉ら3人は、故障を修復した後、午後4時伍井隊長の後を追って、再び知覧を出撃、沖縄周辺の敵艦船に特攻攻撃を敢行している。

第23振武隊の残り8人の内、前田、塩島、柴本、豊崎、清水の5名は第二陣として2日後の4月3日午後3時30分、知覧を出撃し、沖縄周辺の敵艦船群に体当たり攻撃を敢行している。

陸海軍航空特攻隊出撃年表（昭和19年10月21日～20年8月15日）によれば、第1陣4機、使用機種は一式戦闘機「隼」、第2陣5機、使用機種は九九式襲撃機となっている（注：軍用機の型式は制式採用された皇紀年号を表示している。従って一式は昭和16年製、九九式は昭和14年製）。



第23振武隊員（左）と伍井芳夫隊長（右）

4　第23振武隊長伍井芳夫と遺族

伍井隊長の最後の模様は、元学徒兵で、知覧の警備に当たっていた日本生活教育連盟顧問の丸本政臣氏が著書（ウェブサイト「生活と教育」1995年5月号の中の連載「私と沖縄」）で次のように記されている。

「4月1日には、予測どおり米軍は沖縄本島の中部西海岸に上陸を開始した。1日のうちで6万人の兵員を上陸させた。この間に3月26日についで29日、31日と特攻機は慶良間周辺の米艦船に体当たりを決行した。知覧基地の空気も殺気立つほどに張り詰めてきた。1日には夕方17時から17時30分までに、第23振武隊10機、誠第39戦隊6機、飛行第17戦隊7機が相次いで出撃した。

目指すは嘉手納海岸の空母、戦艦、駆逐艦、輸送船である。目的地点に到達するのは150分くらい後で、その頃は通信室に上級士官が集まって戦果にかたずをのむことになる。

隊長機につけられている無線機から『バージニア（筆者注：戦艦ウェストバージニア）発見、我突入ス』と第23振武隊長伍井中佐（筆者注：戦死後2階級特進）から打電してきたときは、万歳、万歳の声が爆発した。しかし援護機のない悲しさ、多くの機が途中撃墜されたもようであった」

他の資料と若干の食い違いがあるが、いずれにせよ、伍井隊長が昭和20年4月1日に散華したことは関係者の証言から立証される。

伍井隊長が戦死した時、妻園子26歳、長女満智子3歳10ヵ月、次女智子1歳7ヵ月、長男芳則5ヵ月の4人の遺族が残された。

当時、特攻隊員として散華した戦死者は「軍神」と呼称され、社会的評価は高かった。

特に戦死は軍人として、日本臣民の最高の栄誉であった。従って遺族は、その戦死を嘆き悲しむことなく、我が家の誉れと思わなければならない時代であった。

この様な社会的風潮から、遺族は涙を流したり、泣いたりせず戦死を誇りに思い、毅然とした態度を要求されていた。

妻、園子が夫の戦死を知ったのは、4月3日朝のラジオの戦況ニュースであった。「4月1日早朝、手に桜の花を持ち、第23振武隊特攻隊長伍井大尉、以下何名と出撃す」と報じた。そして沖縄海域において敵艦隊に突入したと、ニュースは繰り返された。

余りにも早い出撃であった。夫は永遠に帰らない。3月25日の帰宅が今生の別れとなった。この日、夫は勤務地の栃木県壬生飛行隊から埼玉県桶川町（現・桶川市）の自宅へ最後の別れの

ため帰宅した。そして3人の子供の一人一人に声をかけ、抱き締めた。特に生後5ヵ月に満たない長男の芳則には、男子として家族の向後を託したという。

園子は「この非常時、お国のためなら当然のことです。3人の子供の成長を楽しみに生きていきます。しっかりと育てていきます。心置きなく出発してください。武運をお祈りします」。妻のこの健気な送る言葉に対して「それでは任務に邁進いたします」。これが、夫の最後の言葉となった。そして別離に際して用意していた爪と髪の毛が遺品として残された。

2日後の3月27日午前8時30分、予告どおり栃木県壬生飛行場を離陸した夫の操縦する特攻機は家族や肉親の待つ桶川の自宅の上空を2回旋回し、翼を振りながら別れを告げ、知覧基地を目指し、西の空へ消えていった。出撃する者も見送る者も地獄を見る思いだった。

園子は長男をおんぶして、長女を前に立たせ次女の手を引き、片手を大きく振って機上の夫を見送ったという。

そして今、ラジオのニュースで夫の壮烈な戦死が報じられたのを耳にして、夫の前では毅然とした態度で軍神の妻を演じきったかに見えた園子は、張り詰めていた緊張感が一度に緩み、泣き伏した。この世の地獄であった。

5　遺族に宛てた最後の手紙と遺書

夫から園子に最後の手紙が届いたのは、夫が特攻出撃した4日後の4月5日で、この時夫は既に幽明境を異にしていた。

◇

本28日最前線に来た。
至極元気なり。思い切ってやるぞ。
後をしっかり頼む。子供を丈夫に育ててくれ。大いに頑張ってくれ。
体に注意せよ。皆に宜しく。
金不要に付、送る。
三月二十八日夜　　伍井芳夫
園子殿

◇

手紙を読んだ園子の精神的ショックは余りにも大きく、長男芳則の生命源である母乳は止まってしまった。

夫は園子に手紙を書く傍ら、3人の子供にも遺書を残し、実兄の伍井祐佐矩に預けていた。園子が2通の遺書を受領したのは4月10日であった。

◇

〔遺書　2通〕

芳則宛及び満智子・智子宛

物ノ道理ガ解ル年頃ニナッテカラ知ラセヨ

◇

芳則ニ一筆遺ス

父ハ大東亜戦争ノ五年目ノ春、名誉アル特別攻撃隊第二十三振武隊長トシテ散華ス

オ前達ノ成長ヲ見ズシテ去ルハ残念ナルモ悠久ノ大義ニ生キテ見守ッテイル

良クオ母サンノ謂イ付ヲ守ッテ勉強シテ日本男子トシテ、陛下ノ御子トシテ立派ニ成人シテ下サイ。

将来大キクナッテ何ヲ志望シテモ良シ、唯父ノ子トシテ他ニ恥ザル様進ミナサイ。

オ母サンニハ大変ナ苦労ヲ掛ケテ頂イタノデス。御恩ヲ忘レズ立派ナ人トナッテ孝行セネバイケマセン。体ヲ充分鍛エテ心身共健全ナルベシ

昭和二十年三月九日　　父ヨリ
芳則　殿

◇

親愛ナル満智子・智子ヨ　オ父サンハ大東亜戦争ノ勝利ノ為昭和二十年ノ春　特別攻撃隊第二十三振武隊隊長トシテ日本男子ノ最大ノ誉ヲ得テ立派ナ戦果ノ下ニ散リマス

オ父サンハ姿コソ見エナイケレド護国ノ霊トナッテ何時マデモ何時マデモ生キテ居リマス　満智子モ智子モ克クオ母サンノ謂イ付ケヲ守ッテ立派ナ人トナリナサイ　弟ノ芳則ヲ援ケテ軍人ノ遺族トシテ立派ニ成人シテ下サイ

オ母サンハオ前達ノ養育ノ為　言葉ニ云イ表セナイ非常ナ苦労ヲシテ来タノデス

大キクナッタラ此ノ御恩ヲ忘レズ必ズ孝行シテオ母サンヲ楽ニシテ差上ゲナケレバケマセン　オ父サンハ　オ前達ノ成長ヲ見守ッテオリマス　病気ニナラナイ様体ヲ丈夫ニナサイ

昭和二十年三月九日　　父ヨリ
満智子
智　子　殿

◇

伍井芳夫が出撃の前日に書き残した色紙には「人生の総決算。何も謂ふこと無し。伍井大尉」と墨書されており、文字通りこの世における絶筆となった。

この絶筆は、昭和57年に園子が知覧特攻基地戦没者慰霊祭に出席のため知覧を訪れた際、遺品館に展示されているのを発見した。

その時、園子は65歳になっていたが、「主人の諦めきった心境がにじみでているようでたまらない」と娘たちに語ったという。

6　伍井芳夫と妻・園子の生い立ち

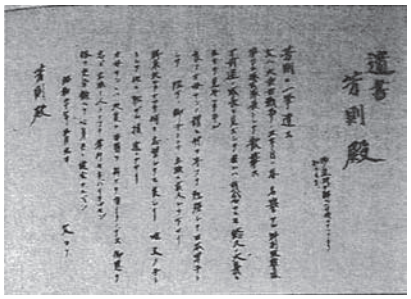
伍井芳夫は明治45年7月21日、埼玉

県熊谷市に近い北埼玉郡豊野村に男3人、女3人の次男として誕生した。唯一人、明治生まれの特攻隊員だった。

不動岡中（現・不動岡高校）を経て昭和7年1月、少年飛行兵を志願して飛行第5聯隊に入営した。飛行機乗りになるのが夢だった。

園子は大正7年9月30日、埼玉県入間郡坂戸町（現・埼玉県坂戸市）に3人姉妹の次女として誕生した。父君は開業医で、埼玉権名士録にも掲載されるほどの名士だった。

川越高等女学校（現・川越女子高校）を経て、東京女子専門学校（現・東京家政大学）を卒業するが、小学校、女学校時代はお手伝いさんがいて、人力車で登下校するほどの裕福な家庭環境だった。姉の愛子は医者と結婚しており、当然園子も医者に嫁ぐと誰もが思っていた。ところが、見合いの話が幾つ持ち込まれても、全て断ってしまい、何故か飛行機乗りの軍人を希望した。



そこで、軍医をしていた姉の夫が、伍井を紹介した。園子と見合いをした時、伍井は准尉で、北足立郡川田谷村（現・埼玉県桶川市）所在の熊谷陸軍飛行学校桶川分教所で、偵察機の教官をし、航空士官学校への入校を目前に控えていた。見合いから3ヵ月後の昭和14年3月5日に二人は挙式した。伍井は26歳、園子は20歳だった。純白の積雪が二人を祝福した。伍井が勤務する首都圏の北の玄関口である桶川飛行場の歴史に関して私は、本誌昨年10月号に詳述した。現在、本田航空㈱の管理下に運営されており、関東地区で小型機が一番多く集結する飛行場として知られている。

伍井は、結婚1年後の昭和15年9月航空士官学校を卒業と同時に任官し、翌16年5月、大阪大正飛行場（現・八尾飛行場）の107防空隊に配属された。任務は敵の動向を察知するための司令部偵察で、連日新鋭機に搭乗し太平洋一帯を飛行する軍務だった。大阪府柏原町（現・柏原市）の将校住宅に居を構え、生まれて間もない長女との家族3人暮らしは平穏な日々だった。

2年後の昭和18年8月1日、伍井は熊谷陸軍飛行学校桶川分教所の教官となり、一家は桶川町へ転居する。同月18日に次女智子が誕生し、翌年10月31日には長男芳則が相次いで誕生した。その翌日、伍井は大尉に任官した。

この間、我が国は昭和12月7月蘆溝橋事件に端を発した支那事変が拡大して、中国との全面戦争に突入した。さらに昭和16年12月、大東亜戦争に突入、緒戦における勝利も翌年6月のミッドウエー海戦を契機に敗色の道を突き進むことになる。

伍井家においても平和な家庭生活は5年を経過していたが、運命の転換期は昭和19年12月に到来した。この月19日に特攻要員としての内命が下り、伍井は千葉県の下志津教導飛行師団の銚子飛行場に転属となる。特攻要員に指名されたことは家族に内密にして銚子へ単身赴任した。この地で過酷な特攻訓練に明け暮れたが、映画「乙女のいる基地」の撮影に協力、飛行指導を行ったのもこの頃であった。

昭和20年2月28日、伍井は下志津教導飛行師団で結成された第23振武隊隊長に任命される。構成人員は12名で、その内、妻帯者は10名、のほか岡本准尉（後に機器の故障で生存者となる）にも子供がいた。

戦況の悪化と共に、沿岸部の飛行場への米艦載機による攻撃が激化したため、同年3月、壬生飛行場へ移動待機し、同月27日に知覧へ出発となる。そして知覧基地出陣の先陣を切って沖縄海域で散華した第23振武隊の最後の模様は前述した通りである。

伍井家に不幸は続いて訪れた。この年7月22日、長男芳則は自家中毒症のため亡き父の後を追うようにして帰らぬ人となった。僅か8ヵ月余のはかない命であった。

そして、この年10月19日に、伍井の実兄を通じて「戦死公報」が園子の許に届けられた。夫の生存に関する一縷の望みも断ち切られ、終戦と共に全て

が終結したのである。

7　戦後の遺族

伍井の次女、臼田智子の許に、出撃直前に発信された園子宛の数通の親書、戦前戦後を通じて園子に寄せられた隊員や隊員の遺族からの幾多の書簡が残されている。

これらの文書を解読すると、伍井の高潔な人格、肉親と家族に寄せる恩愛の熱情と部下を思う人間愛に心打たれる。

戦後、園子は二人の幼い娘を抱えて自立の道を選択した。昭和21年4月1日から教師として桶川国民学校（現・桶川小学校）の教壇に立ち、33年間に及ぶ教員生活を無欠勤で通し、昭和54年3月、桶川北小学校を最後に定年退職した。威風堂々とした存在感のある先生であったと言われている。

臼田智子令嬢

学校を退職してからは苦難の戦後が終わったのか、毎年夫の命日の4月1日には靖國神社に参拝し、同時に知覧や沖縄、フィリピンなどを慰霊して回った。ただ夫の散華した沖縄には、身体が震えてしまうという理由で、それ以降2度と足を運ばなかったという。

晩年は、桶川市遺族会婦人部長として活躍するなど、多くの人達との交流に恵まれた。

そして昭和62年3月25日、享年68歳をもって夫の待つ天国へ旅立った。死の直前、「私は激動の時代に生きた。今思えば悔いはない。人間としていろいろなことを経験した。人間として悔いはない」と語られている。

園子は娘たちに、父は特攻隊員だったことをほとんど語らなかった。智子は父が特攻隊員として戦死したことを知ったのは、次のような出来事の結果だという。

昭和30年、智子が中学1年生の時に第六航空軍の司令官として沖縄特攻作戦の指揮を執った菅原道大元中将が、慰霊のため突然、園子を訪ねて来て、仏壇に手を合わせた後、智子の顔を見ながら、このような幼い子供がいる隊員は特攻隊より除外した筈だが、と不用意な発言をした。この言葉を聞いた園子の表情は豹変し、一瞬大声で「あなた様は・・・」言いかけて言葉を呑んだという。

亡母の遺志を継承した智子は、現在埼玉県遺族連合会理事、桶川市遺族連合会会長、旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会会長として活躍している。

平成15年、亡母の17回忌に際し、過酷な時代の真実、戦争の悲惨さを次代に伝えるため『―父と母の生きた時代―特攻隊長伍井芳夫』臼井智子著（中央公論事業出版）を上梓した。

本稿執筆に際し、故人のご令嬢臼田智子さんには、取材や資料等で多大なご尽力を賜りました。
ここに深甚なる謝意を表します。

講演会「人間魚雷回天」に参加して

会員　原島　淳子

平成26年9月13日（土）、荒川区日暮里において開催された「あなたは人間魚雷回天をご存じですか」と題する講演会に参加しました。

講師は、回天特別攻撃隊多聞隊の搭載潜水艦の一艦として、回天5基を搭載して出撃した伊三六六号潜水艦の乗組員で、当年90歳になる杉田秀夫元海軍一等機関兵曹でした。同氏は浜松から上京されるため、90歳という高齢ゆ

え、体調を懸念されていましたが、お目に掛かった姿は、とても90歳とは思えない程お元気そのもので、敬礼をされた姿勢は、当時の若い兵士の姿そのままに思えてなりませんでした。

杉田氏は、昭和17年に横須賀第二海兵団に入団し、鈴鹿海軍航空隊に給水ポンプ員として赴任し、その後南方への出撃命令により、ニューギニアのラエに上陸し、第三防空隊25ミリ機銃員として勤務した後、潜水艦乗りになったという経歴の方です。

何故潜水艦乗りを希望したのか、それはニューギニアから第5期普通科内科術練習生として、海軍工機学校に入校のため帰国する時、ラエにたまたま入港していた伊号潜水艦に乗艦してラバウルに戻ったことがきっかけとなったそうです。「艦の食事が良かった。どうせなるなら潜水艦乗りになろう」そう思ったと仰っていました。

昭和19年に伊三六六号潜水艦乗組を命じられて乗艦し、食料や武器等の輸送を行い、昭和20年3月に帰投し、休養後、艦に戻ってきた時、艦の様子が異なっていることに気付いたとのことでした。それは、回天を搭載するために、艦が改装されていたためでした。

同年8月1日、回天特別攻撃隊多聞隊の回天5基を搭載して出撃。多聞隊の隊員は、隊長成瀬謙治中尉（海兵73期）・鈴木大三郎少尉（予備学生）・上西徳英一飛曹（甲飛13期）、佐野元一飛曹（甲飛13期）岩井忠重一飛曹（甲飛13期）の5名の方々でした。

8月11日、パラオ北方500浬において、敵輸送船団に対し回天3基を発進（2基は故障のため発進できず）、命中爆発音を確認したそうです。その後、残りの2基を修理し、作戦続行という時に終戦の報に接したとのことでした。

光基地（山口県光市）より出撃し、回天発進までの10日間、成瀬少尉（戦死後大尉）とは、後数日で死んで往く人なのに、同年輩ということで、とても気が合った、と杉田氏は仰っていました。回天発進の時、隊長基の固縛バンドの切離しを任され、お互いにハッチを閉める最後の最後まで「往きます」「お願いします」と何度も言いながら、ずっと手を握り続けていて、その時の成瀬少尉の手のぬくもりは今でも忘れられずに残っており、発進後遠ざかっていく回天の音が今でも耳に残っていると、言葉を詰まらせながら話してくださいました。「この時の話をするといつも胸がつまり、涙が出てしまうのです」と話される杉田氏の胸中は計り知れないものがあります。また「行って来ます」とは言わず、「往きます」と言った成瀬少尉の言葉の意味、重みが胸に迫り、目頭が熱くなりました。戦後70年を迎えますが、戦争を実際に体験された方々が少なくなって来ている中で、大変貴重なお話を聞かせていただいたと思います。

人の命を軽んじる者の多い昨今、このような貴重なお話を沢山の人に聞いてもらいたい。各学校で、命の授業としてカリキュラムに取り入れてほしい。慰霊祭や講演会に参加させていただく度にいつもそう思います。

特攻機の直掩機もまた特攻機と同じように、回天搭載艦もまた、特攻艦と思っても過言ではないと思います。回天作戦に参加して未帰還となった潜水艦8隻、その乗員810名の方々の御冥福も祈らずにはいられません。そして、後に続く時代の人達にも慰霊・顕彰を続けてほしいと切に願っております。

伊三六六号潜水艦の最後は、昭和21年4月1日、五島列島沖において、米軍により爆破沈没処分とされたことを記しておきます。

最後にこの歌を捧げます。

「君が往く　光の中に　咲く桜」

謹んで回天の英霊に捧ぐ 舞台「たからモノ」を観て

会員（遺族）廣嶋　文武

今年5月18日の世田谷・特攻観音月例法要に、珍しく多くの若人が参詣されていた。直会の席で、代表者のきじまみさんに聞くと、月末にあの人間魚雷・回天の舞台公演があるので、事前にお参りに来ました、とのこと。若者たちは自己紹介で、そのことをPRしていた。小生は考えた。この演者たちが、どれほど回天のことを知っているのかと。そこで尋ねると、演出者が大

津島に行って十分調査して脚本を纏めていますとのことであった。しかし、実は演者の若い人たちには、回天についての予備知識はないとのこと。

心苦しいが、小生も第四御楯特攻隊員として戦死した兄（廣嶋忠夫・一飛曹・甲飛12期）と同級生の、北村鉄郎一飛曹（甲飛13期、訓練中平生基地にて触雷戦死）が、『特別攻撃隊全史』の回天戦没者名簿にありながら一度も大津島や平生に会いに行っていないという心苦しさもあって、早速5月30日の初日の舞台を観に渋谷区文化センターの伝承ホールに足を運んだ。

機密作戦に志願する。愛する者との別れのシーン

「福島おきあがりこぼし芸術祭参加
舞台　たからモノ
主催　きじさこプロジェクト
脚本演出　迫田　元
企画プロデュース　きじまみ
期日　5月30日、31日
場所　渋谷区文化センター
伝承ホール」

この劇場は、初めてであるが、伝承の名に相応しい雰囲気であった。

劇は、一人の回天生き残りの老兵が懐かしい基地を訪れて、若いその地の娘さんと会い、当時の基地や訓練の厳しさなどを語るプロローグに始まり、青年の生い立ちや軍隊での戦友との友情、そして、悲しくも寂しくもある恋人や父母との別れを織り交えてのエピローグとなり、この間、回天のエンジン音や戦場での突入爆破音を織り交えての効果音が、臨場感そのままで舞台の幕は静かに降りた。

若い劇団員たち

会場には若者たちが多く、年配者は少なかった。終演後、若い出演の俳優さんたちが、観客の皆さんと、たった今の感激―やり遂げた歓びか―で、談笑し合い、ロビーはすぐには立ち去り難い光景であった。

きじまみプロデューサーは、後日、再び特攻観音堂を訪れ、「この作品を通して、伝えなくてはならないものが沢山あります。若者たちに演劇を通じて戦争と平和について考えてもらいたい」と話していた。

第18回憂国碑「錨地蔵尊」御霊祭に参列して

会員　原　知崇

平成27年7月20日（月）、祝日・海の日、山形県の出羽三山奥の院、湯殿山仙人沢霊場、湯殿山神社に祀られる「錨（いかり）地蔵尊」御霊祭に参列した。憂国碑「錨地蔵尊」奉賛会の主催で毎年執り行われており、今年は第18回目である。

憂国碑「錨地蔵尊」は、山形県回天会により、平成9年、回天特別攻撃隊戦没者の御霊を慰霊・顕彰するとともに、世界の恒久平和を祈念するために建立されたものである。この地は、即身成仏信仰で知られる修験道の霊地、湯殿山仙人霊場で、湯殿山神社は、その山腹に鎮座まします。錨地蔵尊碑は同神社大鳥居の近くにあり、錨を抱えた回天搭乗員の姿を模して造られたも

のである。

本御霊祭は、例年、錨地蔵尊碑の前で執り行われているが、今年は、夏なお肌寒さを感じる冷雨のため、近傍の寺の堂内で斎行された。この日参集した40数名の参列者の中には、海上自衛隊の潜水艦乗組員ＯＢの方々も多く、張り詰めた空気の中で厳粛に祭事が進められた。初めに神官による神儀が執り行われた後、修験者姿の奉賛会事務局長によって般若心経が読誦された。正に神仏習合による斎行である。

その後、海軍式の式典となり、地元有志の「上山特別儀仗隊」による喨々たるラッパ吹奏のもとに軍艦旗が掲揚

された。今回は、雨のため、弔銃斉射は行われなかった。同儀仗隊は、毎年御霊祭に出仕され、準備と教練を重ねられているとのことである。

式典終了後、冷たい雨の中にも拘わらず、参列者は、錨地蔵尊碑に参拝して名残を惜しんでおられた。

大東亜戦争に従軍された多くの若者が、アジアや太平洋の各地の山野や海に、空に、勇戦され、あるいは特別攻撃隊員として挺身散華されたが、その勇魂は、船の安全を保つ「錨」のように、平和を支える礎となられたのである、というのが「錨地蔵尊」の由来だそうである。御霊祭の追悼の辞では、長さ約15ｍ、直径１ｍの人間魚雷回天を走行させて、敵艦に命中させることは、至難のことであり、それを乗り越えて特攻に散華された若者達の苦難が生々しく語られた。このような史実を語り伝えていくことこそが、我々の為さねばならないことであると、熱く感じた。

・憂国碑「錨地蔵尊」奉賛会事務局
電話　０２３４－４２－０６９５

第17回第二国分基地十三塚原神風特別攻撃隊慰霊祭に参列して

評議員　及川　昌彦

平成27年８月15日（土）、鹿児島空港前にある霧島高原ビール株式会社構内の慰霊碑前において、加治木島津家第13代当主島津義秀氏を祭主に迎えて表記の慰霊祭が執り行われた。

11時に国歌斉唱で始まり、鎮魂の鐘とともに黙祷を捧げ、中学生による遺書の奉読、野太刀自顕流による奉納演武、献花と続き、主催者である霧島高

原ビール株式会社山元正博会長の挨拶、来賓として参列された前田終止霧島市長及び有村久幸前溝辺挨拶町長の挨拶、並びに遺族代表２名による挨拶で閉会となった。

この基地は、第五航空艦隊の基地を束ねる九州空の傘下にあった。昭和20年３月18日以降、第一～第四正統隊、第一及び第三八幡護皇隊、第一及び第三草薙隊の各特攻隊が続々と出撃し、沖縄方面の米艦船に猛攻を加え、多大の戦果を上げて散華されたのである。

戦後70年、特攻の兄に捧ぐ「五体を砕きて悠久の大義に殉ず」

会員（遺族）　廣嶋　文武

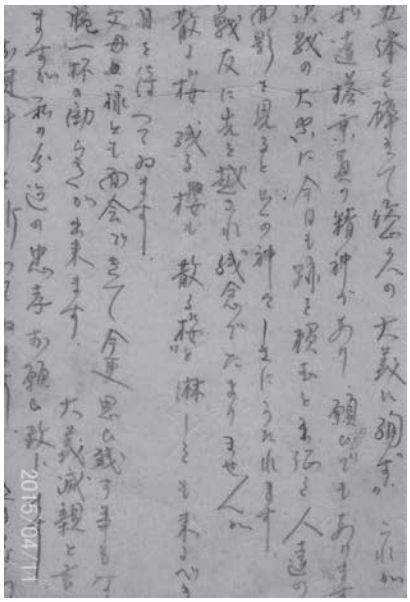
○初めに

右の写真は、昭和20年6月2日、鹿児島県の第二国分基地に面会に行った両親が、やっと撮ってきた兄の写真である。そして、その面会の直後に弟の私宛に送られてきた郵便葉書の冒頭に書かれた言葉が表題の「五体を砕きて悠久の大義に殉ず」であった。以下その葉書には、次のように書かれたいた。

「・・これが私達搭乗員の精神であり、願ひでもあります。決戦の大空に今日も後を頼むと出で征く人達の面影を見ると、その神々しさにうたれます。戦友に先を越され残念でたまりませんが、散る桜　残る桜も　散る桜と、淋しくとも来るべき日を待っています。父母様とも面会できて今更思ひ残す事もなく、腕一杯の働きができます。大義滅親と言いますが、私の分迄の忠孝お願ひ致します。御健斗を祈っています。さようなら」

海軍一等飛行兵曹廣嶋忠夫（以下「兄忠夫」と略記する。）

昭和20年5月○日付けの葉書は、茨城県百里原海軍航空隊からのものであったが、同じ5月○日には、何と鹿児島県加治木局気付の軍事郵便が届いた。父萬吉54歳、母ハルヲ53歳の両親は、早速加治木局消印の葉書を頼りに面会に向かう。あの戦時下によくぞ鉄道の切符が入手出来たこと、更にカメラに至っては、撮影した事すらなかったのに、と思いきや、後日談として、父の実弟友助叔父さんに、万事教えて貰って、当時、3人一緒に撮るのは不吉と言われていたので、兄と母、兄と父と二人ずつ撮ったとのこと。この写真が唯一の遺品でもあり、形見ともなって貴重な、たったの一枚となってしまった。私は、この写真を片時も肌身離さず持ち続けている（詳しくは後述）。



○2年4ヵ月の軍隊生活

ここで、兄忠夫の軍歴を辿ってみよう。

昭和18年4月1日、鹿児島海軍航空隊甲種飛行予科練習生（予科練12期）として入隊。（憧れの七ツ釦）

昭和19年4月1日、飛行練習生として鹿児島県国分海軍航空隊入隊。艦上爆撃機の操縦生となる。

昭和20年1月1日、茨城県百里原海軍航空隊―軍隊で初めての正月を経験する。

昭和20年2月○日、千葉県香取海軍航空隊基地。昭和20年4月○日、茨城県百里原海軍航空隊基地。

昭和20年6月○日、鹿児島県第二国分基地。

昭和20年6月○日、茨城県百里原海軍航空隊基地。

昭和20年8月9日、16時40分出撃。18時15分戦死（金華山東方沖２００km海上）。2年4ヵ月の海軍での生涯を終える。

○戦死を知る

昭和20年8月15日正午、日本国民は玉音放送で終戦を知る。

長兄純孝（ふといあんちゃん）は、昭和18年7月、召集令状で中国、そして、満洲チチハルに一兵卒としていたが、ソ連の攻撃でどうなったかと心配し、次兄悌二郎（ていしゃん）は、長崎県大村海軍航空廠にいたので、まあ無事。弟文武（おとごろう）は、宮崎農専獣医畜産学科一年生で、三日三晩宮崎駅に並んでやっと鹿児島本線三角駅までの切符を入手して帰省。兄忠夫は茨城県なので、すぐにも復員してくるものと待ちに待った。文武は、朝な夕な裏の玄界灘に佇んでは、「早く帰ってこいよ」と叫び、祈り続けた。

宮崎には、9月半ばにやっと登校したが、「何してたんだ」と大目玉を食らった。家族はみんな今日か明日かと復員を待ち望んだ。

そして、昭和20年10月、父は、博多の市電で偶然、飛行靴に51分隊と記してある青年を見付けた。尋ねると、「廣

嶋一飛曹は戦死しました」と教えられた。百里原基地の同期で、隣の鞍手軍出身の坂田一飛曹であった。

さあ大変。父の頭髪は一夜にして白髪となり、母は33歳（女の厄年）の時の子だったからかと、家族は嘆き悲しんだ。そして、父萬吉は悲しみの中で動いた。詳しい戦死の状況と、基地は内地の茨城県だから、何か遺品などはないかと。当時、第二復員局（海軍）の残務整理に関わっていた601空司令杉山利一大佐に再三問い合わせたが、良い返事はなかった。夏も過ぎて秋、そして、冬の昭和20年11月11日にやっと返事が届いた。金華山沖で戦死の旨。続いて11月18日付けで、分隊長渡辺清規大尉から詳報が、海軍用箋で届いた。

昭和20年4月　茨城県百里原航空基地

8月9日14時27分、第三小隊四番機として発進したが、エンジン不調のため引き返す。同日再び16時40分、第四小隊二番機として発進。18時15分頃、愛機彗星と共に散華。金華山沖東方200kmとのことであった。ここで、両親はようやく戦死を認めることになる。遅れてやっと戦死公報が届いた。

年は改まって昭和21年7月24日遺骨受理。同月28日町葬。

弟文武が、白木の遺骨箱を抱いて葬送。あの日、津屋崎町出身の英霊は何柱であったかなど、合同葬のことは忘却。同日納骨。宝蓮寺の青木御住職からは、有り難い法名「顕忠院釋哲心薫洋居士」を頂き、玄界灘が一望できる防風林の一角に、97年前、シベリア出兵で戦死された本家の伯父さん廣嶋作五郎伍長の横に墓が建立された。しかし、今はもうない。というのも、部落ごと新たに梅光院の納骨堂に葬られることになったからである。そして、戦死者だけの忠霊塔が建立されている。部落はたった45世帯しかないが、大東亜戦争の激戦地ガダルカナル島やレイテ島攻撃の落下傘部隊で戦死し、『特別攻撃隊全史』に名を留めている方、そして、兄忠夫の名も刻まれている。いつも兄弟揃って遊んでいただいた、九州で言う「あんちゃん」達である。

○「昭和20年8月9日」という日

忘れ得ぬ昭和20年8月9日という日は、一体、どんな一日だったのだろうか。

①午前0時、ソ連は日ソ不可侵条約を一方的に破棄して満洲国に侵入（何と175万人）し、日ソ戦となる。

②午前11時2分、長崎市に原爆投下。8月6日午前8時15分の広島同様、大被害となる。軍は新型爆弾と表現。

③木戸内大臣、鈴木貫太郎総理がポツダム宣言の受諾について動く。翌10日御前会議となり、宣言受諾。

④御前7時、第三航空艦隊司令長官より作戦命令。12時40分、攻撃命令。

・14時10分、第一攻撃隊発進　4機
・14時21分、第二攻撃隊発進　4機
・14時25分、第三攻撃隊発進　4機

兄忠夫は、榊原中尉指揮の下発進したが、エンジン不調のため引き返す。

・16時40分、第四攻撃隊発進　3機
18時15分頃、敵艦突入、戦死。

兄忠夫は、第四小隊長近藤一飛曹指揮の下、二番機として発進。

そして、復員された近藤一飛曹は、度々墓参して下さり、弟文武と生家の裏の玄界灘の砂浜を歩きながら、当時のことを詠んで下さった。

君と我発ちし日を思いつゝ
　なぎたる海を我はみており
大海に沈まんとす陽にしばし
　君が御英姿を思い出でしも
この海のうち続くところ君逝きぬ
　浜に我佇みしばししのばむ

・杉浦喜義中尉（海兵72期、出撃されず）は、「帽振りながら見送ったが、廣嶋機は、松林すれすれに飛び立って行ったよ」と述懐された。

・林　山次郎二飛曹は、「目標に向かって3機で編隊を組まず、目的を果たせ」との指示だったので、廣嶋機は、飛ばす、飛ばす、追いつくのに大変なようだった」と述懐されていた。

・兄忠夫戦死の詳報を知らせて下さった、当日の第一攻撃隊長渡辺清規大尉（海兵71期）は、「君は日常寡黙たり、その内に一死君國に殉ぜん覚悟の堅さを思い、ただ敬服にたえざる処に御座候」としたためて下さっている。

○艦上爆撃機「彗星」について

兄忠夫の搭乗機は、艦上爆撃機「彗星」であるが、艦上爆撃機「彗星」には、愛知航空機製・液冷式発動機「熱田」装備のものと、三菱重工製・空冷式発動機「金星」装備のものとがある。

（**編注**・海軍は、昭和12年にドイツのハインケル社から輸入したＨｅ１１８急降下爆撃機の国産化を計画したが、機体構造と量産準備などの点で中止せざるを得なくなり、新たに空技廠で、高性能の次期十三試艦爆の試作を行うこととなり、第一号機は、昭和15年11月に完成したが、審査の結果、急降下爆撃機としては強度不足で、それを補うための改修には時間が掛かるため、ひとまず昭和17年7月に二式艦上偵察機として制式採用することになった。本来の目的である艦上爆撃機型は、昭和18年12月に漸く制式採用となり、「彗星」11型と命名された。その後本機から21型、12型、22型、33型、43型など多数の改造型が造られた。昭和15年～20年に各型合わせて２１５７機が生産され、昭和18年以降南太平洋を中心に活動したが、愛知「熱田」発動機（液冷式）の不調による稼働率の低下に悩まされた。しかし、三菱「金星」発動機（空冷式）装備の33型以降の機体が造られてからは稼働率も良くなり、戦局の悪化に応じて、艦上爆撃機以外にも斜め銃付戦闘機型、特攻機型などの改造型が造られた。「彗星」11型は、単発、中翼単葉、引込脚、発動機：愛知「熱田」12型液冷式倒立Ｖ型12気筒、１０１０～１２００馬力、自重２４４０kg、全備重量３６５０kg過荷重量３９６０～４２５０kg、最大速度５５２km／ｈ／高度４７５０ｍ、巡航速度４２６km／ｈ、実用上昇限度９９００ｍ、航続距離１５７４～３８９０km、武装：７・７㎜機銃×３、爆弾２５０～５００kg×１＋30kg×２、乗員２人で、靖國神社の遊就館に展示されているものは、昭和47年、中部太平洋西カロリン諸島ヤップ島の旧海軍飛行場滑走路脇のジャングル内で遠藤信彦氏によって発見され、日本テレビ放送網㈱の協力で日本への里帰りが実現し「彗星」ゆかりの陸上自衛隊木更津基地で、飛行機研究家の田中祥一氏をリーダーとして復元され、昭和56年4月5日、靖國神社に奉納されたものであり、ほぼこの型に近い液冷式発動機装備のものである。「彗星」33型は、発動機：三菱「金星」61～62型空冷式複列星型14気筒、１３５０～１５６０馬力、最大速度５６１km／ｈ／高度５９００ｍ、巡航速度３７０km／ｈ、実用上昇限度９９００ｍ、航続距離１５２０～２８９０km、爆弾２５０kg×３、乗員２人で、その他は、ほぼ液冷式の11型又はそれの改造型である22型（愛知「熱田」32型液冷式発動機１３４０～１４００馬力、最大速度５８０km、巡航速度４２６km、実用上昇限度1万７００ｍ）と同じである。）

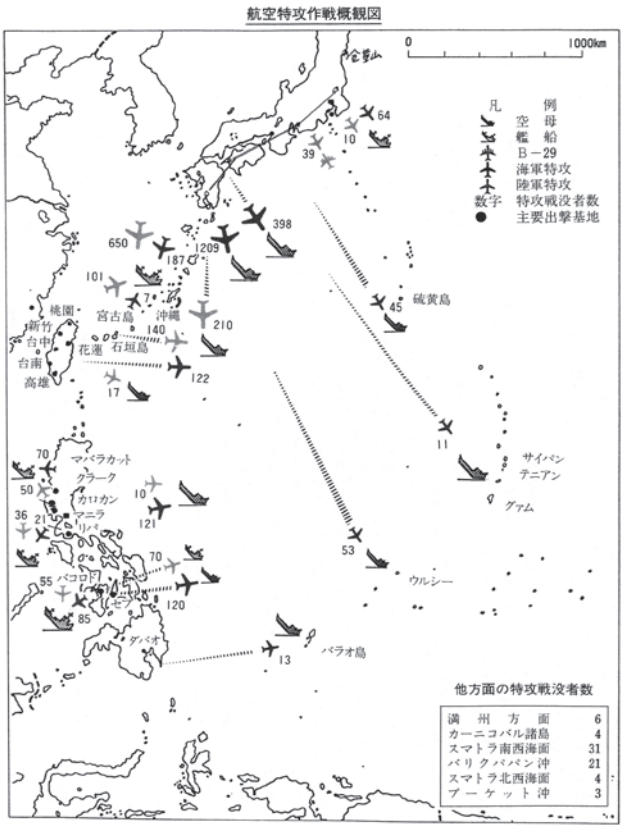
この艦上爆撃機「彗星」を使用した神風特攻は、昭和19年10月25日、彼の関行男大尉率いる敷島隊の零戦隊と共に、大和隊の２機が出撃して以来、１６０機余、３２０名余の勇士が散華されている。

陸海軍の航空特攻作戦概観図は、当顕彰会発行の『特別攻撃隊全史』より拝借して、ここに掲載させていただいた。

昭和60年8月4日、K―1会（601空攻撃第一飛行隊）の慰霊祭に参加させていただいた。靖國神社昇殿参拝後、直会は上野の料亭で行われた。戦後40年を記念する会でもあった。

この601空彗星艦爆隊は、昭和20年2月、千葉県香取基地よりの硫黄島作戦の第二御楯特別攻撃隊、国分基地よりの沖縄作戦第三御楯特別攻撃隊延べ5回42機が出撃し、本土作戦では、百里原基地よりの第四御楯特別攻撃隊延べ3回27機出撃等、全作戦の総合計出撃回数9回、延べ83機、内未帰還機53機、戦死101名であった。

当日は、野村浩三隊長、渡辺清規分隊長を囲み、海軍機関学校出身の島村周二さん、杉浦喜義さん、阿知波延夫さん、竹田秋津さん、野中繁吉さん、桝恭平さん、流鏑馬一二さん、林山次郎さん、近藤運さん、鈴木敏夫さん、上妻忠利さん、小木曾先生御夫妻、そして宮下八郎さんと、まだ思い出せない方もあるが、大勢の戦友方にお会いでき、兄忠夫の弟として感激したが、この会も先年解散された。



一方、予科練甲12期（昭和18年4月入隊）の土浦空、三重空、鹿児島空の生存者の方々の会では、毎年8月15日の終戦記念日に慰霊祭を斎行し、正午、靖國神社に昇殿参拝し、九段会館で直会を行ってこられたが、それにも遺族として招待されていた。土浦空の桜井さん、三重空の久保山さん、鹿児島空の筒井英治さんが世話人で、遺族は3～4名であったが、この会も先年解散された。

○兄忠夫の生い立ち

ここで兄忠夫の生い立ちを見詰めてゆきたいのです。

分家した祖父母が戸籍の筆頭者になります。祖父は、上浜式の製塩業に従事したとのこと。製塩業も食塩が専売品となり、やがて塩田に客土して農業をするようになり、二毛作で、米麦農家になったようです。私共の家が旧津屋崎町の最北端で、狭い道路を挟んで北側が旧勝浦村の塩浜と言います。したがって、兄弟は津屋崎小学校に、道一つで塩浜の子は勝浦小学校に通学しました。父萬吉は、客土などに携わった関係で町役場の農業吏員をしており、我が家は養蚕もしておりました。母と姉二人、長兄が米麦中心の農業をして働きました。塩田跡の米作は、良く出来て一反歩6俵位で、麦や菜種などの裏作や養蚕などをしてやっと生計を立てる程度であり、年中多忙の毎日でした。当時、津屋崎尋常高等小学校には次兄悌二郎、三兄忠夫、末弟文武と3人で通学していました。父は、兄忠夫を鉄道員にしたかったようですが、中学生となり、弟文武は漁師になる予定でしたが、長兄の一声で、兄弟二人中学生となりました。

今年は全国的に、猛暑が続いていますが、夏の思い出としては、海と田圃です。稲作の田植えはともかく、真夏の田の草取りは全く今思い出しても大

変でした。兄忠夫と弟文武は、今で言うノルマが、母から申し渡され、田の草取りが夏休みの最大の仕事だったのです。ガラガラを押して、稲の根の分蘖を促し、除草する仕事です。二人は競争をして一日5～6反歩の除草作業をしました。今思えば・・、近所の人があの兄弟は・・、と褒められていたようです。かんかんと照りつける太陽に汗だくで、昼食時畦道で休憩の昼寝をちょっとするだけで、1日中働く重労働だったと思います。母は、田の草取りが済むと、「博多歩き」を約束してくれました。長姉が居る市内に2～3日泊まりに行くことでした。今はもう時効になりましたが、夜はこっそり映画を観に行って、楽しみました。2本立てで時代劇の嵐寛三郎、坂東妻三郎のチャンバラ映画に兄弟は夢中でした（戦時中は視学官に発見されると謹慎処分にされた）。

靖國神社昇殿参拝記念　甲飛第12期会　平成21年8月15日

兄忠夫の幼年期の写真を見て下さい。農家の三男坊が、いきなり都会っ子になった姿を。前述の大阪の友助叔父さんが、祖母と忠夫を大阪に招いて下さり、三越デパートで喜色満面の姿を。この写真の上に傷があります。兄弟喧嘩に負けた弟文武が、泣きながら破ってしまいました。こんなことしかできなかった最低の弟だったことを深く反省しています。

小学校時代は、担任の松尾稔先生が「ターシャン」と皆が呼んでいたと、追悼文に書いて頂きました。

県立宗像中学校には、高小1年から入学したので、弟文武とは1学年違いでした。率直に言って、兄のお蔭で、中学校を卒業できました。中学校時代は、弟文武は剣道部だったのに、何故か兄忠夫はテニス部でした。テニス部は少人数でした。兄弟とも約1時間かけての自転車通学でした。朝礼で全員集合しているのに、トボトボと走って来る兄忠夫の姿が再三見受けられました。教科書は、大体同じ教科書でしたので、欄外にメモなど書き入れてくれているので、ハイ、ハイと手を挙げて褒められたりしたのは、兄忠夫のお蔭です。一番傑作だったのは、あの予科練の合格発表です。いつもの廊下の掲示板に氏名が発表されました。なんと「廣嶋文武」でした。早速職員室に飛んで行って、「廣嶋忠夫」と書き替えてもらいました。兄忠夫は笑っていましたが、昭和18年3月のことでした。

そして同年3月23日から再び、あの大阪の友助叔父さんが、兄忠夫の予科練入隊1週間前、「裟婆の見納め」にと、兄弟を大阪、京都、奈良、伊勢と名所旧跡を3日間にわたって案内して下さいました。今も記憶に残るのは、飛行神社や伊勢神宮です。そしてあの三笠山で鹿と戯れた写真は大切にしています。そして兄忠夫は、海軍軍人として出発するのです。

なお、紙面の都合で割愛しますが、兄忠夫が宗像中学3年生の、昭和17年2月8日に綴った作文「大東亜戦争と吾等の覺悟」があります。8節にわたるもので、戦時下の情勢を的確に把握したものでした。

○三十三回忌を終えて

昭和52年8月7日、父萬吉、長女静子、弟文武は、宮城県牡鹿半島沖の金華山を訪れ、「もう三十三回忌を済ませ、9日、靖國神社の永代神楽祭に、皆で揃って参拝するよ」と、遥か東方200㎞沖に向かって報告しました。

父萬吉が忠夫の便りを大切に保管していることを知っていた姉弟は、「何とか残しておきたい」と話し合いました。50余通の手紙類には、その時々の情報が読み取れ、元気一杯訓練に励み、

航空兵として、しっかり腕を磨いていることと、農家の多忙さや両親、働き手の長兄（ふといあんちゃん）の出征後の兄嫁にも気遣いの文言ばかりでした。また、その時々の通信には、欠かさず、「兄さん（こまいあんちゃん）頑張れ」とありました。

ところで、当時、弟文武は、世田谷区で、動物病院の開業獣医師をしており、毎日イヌ、ネコ等の診療に携わっていましたが、当時幸いに、随筆家・俳人として著名な江國　滋先生の愛猫を診療中であったので、早速先生に相談してみたところ、知り合いの出版社から、『戦艦大和ノ最期』や『海軍主計大尉　小泉信吉』など参考にしたらと、本棚からお持ち頂き、種々こまごまと御教示を頂きました。お蔭様で、廣嶋萬吉編『鎮魂　海軍少尉　廣嶋忠夫』を出版することができました。

余談ですが、今は亡き江國　滋先生の御令嬢が、直木賞作家の江國香織さんです。

題字は、旧601空司令杉山利一様にお願い致しました。杉山様は、昭和22年夏、わざわざ福岡の廣嶋家に、直接、三階級特進の「功三級」金鵄勲章と「勲六等」瑞宝章を併せて届けて頂きました。当時、静岡市に御健在であることを知り、枉げてお願いに伺いますと、心安くさらさらと御揮毫戴きました。弟文武は、正に将たらんとする方の一兵卒に対する御心情の厚き事を知り、今も心から感謝申し上げております。

○靖國神社の菊の御紋章

平成27年元旦、弟文武は、初めてこの日、靖國神社の初詣でに参拝しました。暮れの大晦日の除夜の鐘は、毎年世田谷観音で撞かせてもらっており、その後、皆で「新年おめでとう」と唱和して帰るのが習わしになっておりました。今年は、それから靖國神社に向かい、行列に並び、社前で英霊に深く頭を下げ、「忠夫兄さん、今年もまた会いに来たよ」と話しました。何故元旦かと言えば、実は、昨年夏までに、遊就館企画の「英霊に贈る手紙」の募集があり、弟文武も、「今こそ届けたい、家族の思い」とサブタイトルにあるように、「こまい兄ちゃんに」と千字枠内の文章を綴って応募しました。応募総数は584通で、入選者の60通が元旦から遊就館内で展示されたのです。弟文武のは、選外でしたが、原稿用紙の拡大版できっちりとファイルされており、対面を果たすことができました。そして、今年の3月29日には、奉告祭が執り行われ、昇殿参拝をし、直会の席で、徳川康久宮司様とゆっくりお話をする機会を頂きました。当日は、全国から520余名の投稿された遺族関係者が参集されたと聞き及んでいます。最高の企画でした。

例年8月9日午前11時から、同じ日に亡くなられた英霊に捧げる「永代神楽祭」が執り行われ、毎年真夏のこの日、兄忠夫に会いに行っています。全国からこの日に参集される御遺族も年々減少しているようですが、70年前、百里原基地から発進された第四御楯隊の原田敏夫一飛曹の御遺族と共に、この何十年来、年に一度この日にお会いすることができますことは、兄忠夫にとっても嬉しい限りだと信じています。同じ特攻隊員だっただけに、この日はなお一層忘れられない一日です。

そして、毎年3月末の「陸海軍特攻隊合同慰霊祭」には、必ず参詣し、多くの関係者と御挨拶できることは、最高の喜びであります。5843名の特攻勇士の御霊安かれと祈り続けるばかりです。

また、ここ数年前から、靖國神社主催「軍馬・軍犬・軍鳩合同慰霊祭」にも、獣医師として玉串奉奠をさせて戴く光栄に浴しています。御神職の祝詞奏上にも「多くの物言わぬ動物達が、ただ一頭、一羽さえも故国の土に還ることもなく、よくぞ使命を果たし、戦場の露と化した功績を称え」と申されています。弟文武が所属する公益法人東京都獣医師会の会報『東獣ジャーナル』に、毎年投稿しています。

遊就館前庭の「特攻勇士之像」は、平成11年3月23日、当時の瀬島龍三会長、最上貞夫理事長が、続いて平成17年6月28日に「陸海軍特攻勇士5843名」の副碑が、当時の山本卓眞会長、菅原道熙理事長が、財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会として建立奉納されました。弟文武も当時理事として参列致しましたこと、無上の光栄と

思っています。兄忠夫の遺品類は、大切に保管して戴いています。

平成27年4月5日、小雨が降り続く中、境内のあの開花宣言の桜樹・染井吉野も満開となり、引きも切らぬ参詣者が列をなして続いていました。その時、余りにも「菊の御紋章」がバッチリ撮れました。思わず、兄貴よ、いつも歌ったであろう「花の都の靖國神社春の梢に咲いて会おう」と・・・。そこには、特攻勇士５８４３柱を含む２４６万６千余柱の、祖国の為には身を鴻毛の軽きに置いて戦いに散華された御英霊が祀られています。深く、深く頭を下げずにはおられないのです。

○特攻観音堂

毎年秋分の日、9月23日、世田谷山観音寺の、特攻隊戦没者を祀る特攻観音堂で、特攻平和観音年次法要が営まれる。神仏習合による法要となって既に8年が経ち、今年で何と第64回目である。全国的にも珍しい慰霊祭ではないかと思う。

初代の山主である太田睦賢和尚が、さ迷える特攻平和観音像を、世田谷観音堂に安置して戴き、今は、二代目の太田賢照山主、その御子息兼照師及び恵淳師によって毎月18日に、特攻平和観音月例法要が営まれており、当日の参詣者一同、「般若心経」及び「特攻平和観音経」を奉誦し、十死零生の特攻勇士を偲び、御霊安かれと祈る。次いで、旧小田原代官屋敷の本坊で、直会が行われるが、約2時間余にわたる会話の中に、各持ち場、立場の話題やニュースを提供して散会する。弟文武も20余年もの間お世話になっています。その間、実に多くの方々にお世話になりましたが、そのお一人お一人については、当顕彰会の会報『特攻』第１００号に、「一期一会」と題して、述べさせて戴いています。吉川英治先生の言葉で言わせて戴くと、「われ以外は皆師なり」ということです。この欄をお借りして、改めて心から感謝申し上げるところです。

古い話ですが、弟文武の兄姉が揃って上京し、靖國神社に昇殿参拝し、特攻平和観音にお参りしたおり、山主は、「何もおもてなしできない」と仰って、山門から清掃、打ち水をして歓迎して下さいましたこと、本当に有り難く存じております。あの時の8人は、鬼籍に入った現在でも、この賢照山主様こそ、特攻勇士の観音様だと信じています。弟文武は、これからも山主様に色々と教えて戴くことばかりです。

○終わりに

さて、最初の兄忠夫の写真は、弟文武の胸ポケットか鞄の中に忘れ形見として３６５日肌身離さず保持しています。北海道から沖縄まで、国内はもちろん、何と言っても神風特別攻撃隊最初の、関行男大尉率いる敷島隊が、10月25日午前7時に出発した、その時刻にフィリピン・マバラカットの東西両飛行場跡で執り行われる慰霊祭やレイテ島の慰霊巡拝に2度も参加して、その偉業を兄忠夫と共に見聞し、報告しました。また、区会議員の海外視察旅行にも、オーストリア、イタリア、スイス、スペイン、オーストラリア、ニュージーランド、韓国と、弘法大師の同行二人に因み、同行三人で、また、従兄弟のいるブラジルやイギリスにも、世界を駆け巡ってきました。

終戦後暫くの間、特攻隊員は、あの大東亜戦争の犠牲者と思い込んでいましたが、特攻観音堂、靖國神社永代神楽祭、各慰霊祭に参列して、それは、「誇り」であり、真の名誉の戦死と信じて、この写真が心に生きているのだと思っています。

○結び

兄忠夫が育った我が生家の裏は玄界灘であり、約２８０年前に築かれた石垣が、かつての製塩業の名残を留めています。打ち寄せる漣、真っ赤に燃える太陽が島影に正に沈まんとする、静かな玄界灘の夕暮れは、兄忠夫が18年間、育ち、泳ぎ、遊んだあの夕暮れと変わらず、ただ、歳月は過ぎ去って行きました。兄忠夫はもう還らない。でも、玄界灘は今は静かで、冬には、荒海となっても、「母なる海」であることに変わりはない。この海が、やがて金華山沖の彼方まで続いているのだから、ゆっくりと、深く、安らかに眠って下さい。

海軍少尉　廣嶋忠夫兄に捧ぐ。

〈完〉

《若者の声》若者たちの「無関心」他二編

学生会員　佐藤　花

（編注・この程、学生会員の佐藤　花さんから次のような文集が、良く整理された史資料と共に、当顕彰会事務局宛に送られてきた。一見して、特攻隊や戦没者等に関する深い想いと鋭い考察力、そして、周囲の無関心な若者たちに対する啓発の熱意に深く感動させられた。今の若者の中にもこのような立派な考えを持った、そして行動力のある人物が存在していることに、驚きと心強さを覚えたので、ここに紹介するとともに、心からエールを送りたい。

因みに、筆者は立命館慶祥高等学校の生徒である。ここに掲記の文章は、筆者が同高校1年又は2年に在学中のものである。）

○若者たちの「無関心」

立命館慶祥高等学校1年佐藤　花（はな）

（2014年5月23日）

皆さんは「回天」という兵器をご存じでしょうか。太平洋戦争末期に日本が開発した特攻兵器です。別名「人間魚雷」。魚雷を人間が操縦し、敵艦に操縦者もろとも体当たりする兵器です。実際にこの兵器で106名もの若い命が失われており、そのうち10名は北海道の出身者です。皆さんはこんな恐ろしい兵器があるということをご存じだったでしょうか？

戦争を経験した人々は「平和の尊さ」や「戦争の悲惨さ」について強い思いがあり、今も語り続けています。しかし、そうした人たちの「生の声」に耳を傾けている若者は果たしてどれだけいるでしょうか？

私の周りの友人にはあまりいません。その理由は「興味が無い」「自分には関係無い」ということなのです。つまり「無関心」ということです。

若者たちはなぜこんなにも「無関心」なのでしょうか？

私はこの原因を「無関心が新たな無関心を生む」＝『無関心の連鎖』であると考えます。

大人は子供たちに、積極的に戦争について学ばせようとしているでしょうか？そもそも子供たちに教えるべき大人たち自身が、戦争のことをどの程度知っているのでしょうか？大人たち自身が、既に「無関心」な状態なのではないでしょうか？

昨年「はだしのゲン」というマンガが「残酷な描写があり、子供たちがショックを受けたら可哀想。」という理由で、学校の図書室から撤去されたという話がニュースになっていました。最近の多くの家庭では、戦争の悲惨さには触れないようにしているのではないでしょうか？残酷な、気持ち悪いものを子供には見せない、知らせない。「日本は平和な国で、もう戦争はしないから、昔の戦争は関係ない。」このように考える大人が増えてきているのです。

子供は親を見て育ちます。その親が「無関心」ならば、その子供もまた、「無関心」になってしまう。これが、「無関心の連鎖」ということです。

大人の人たちは、事実を有りのままに伝える勇気を持たなければ行けません。そして、私たち若者も大人が伝える事に関心を持って耳を傾けなければいけません。そうすることで、「無関心の連鎖」から『関心の連鎖』へと変わるのです。

関心を持つためには、きっかけが必要です。私が「回天」を知ったのは1年前のことです。夏休みに旅行で山口県の大津島へ行くということで、親に「出口のない海」という映画を見なさい、と言われました。私は、その映画がどんな映画かも知らずに、「戦争映画？それ見て何の意味があるの？興味ないから面倒くさい。」と文句を言いながら、嫌々その映画を見たことを覚えています。そこには、明治大学の学生だった主人公が、「回天」搭乗員に志願して、「回天」特攻隊として出撃するまでの様子が描かれていました。今の私たちと変わらない普通の生活や家族や友人、恋人に対する思いがありました。何も知らなかった私は衝撃を受けました。

数日後、「特攻の島」というマンガが居間の本棚にありました。「回天」特攻について描かれたマンガでした。私はそのマンガを自然と手に取り、読んでいました。私よりも少し年上の人たちが、自らの命を犠牲にし、家族や友人のため、残された人たちの未来のために戦った姿を見た時、悲しみと同時に、当時の日本はどうかしていたのではないのか？と、怒りも湧いてきました。将来のある若者が、この戦争で失われたのです。私は戦争の悲惨さを思い知らされました。これも、私が関心を持たなければ、こういった感情にすらならなかったでしょう。

敗戦の辛い記憶を思い起こしたくないという気持ちから、戦後日本では、戦争について語ることが避けられてきました。それがこの「無関心の連鎖」を引き起こした原因なのです。

しかし、嫌な過去・間違った過去であるからこそ、積極的に触れ、そして、

皆で考える必要があるのではないでしょうか。

現在、「憲法第9条」の改正や「集団的自衛権」が話題になっています。戦争というものが実に、私たちの身近な問題であるということを思い起こさせます。そんな中、過去の戦争についてよく知らない人々が、自分自身の考えを持って、これらの問題について議論できるのか、疑問に思うのです。

「無関心」は人々に過去の貴重な経験を振り返り、それを生かすチャンスを失わせ、再び失敗を繰り返させるのです。それを防ぐためには、私たち一人一人が過去の戦争に関心を持ち、真剣に考えることが必要なのです。そして、何より大切なことは、戦争を経験した人たちの「生の声」を聞くことです。戦争を経験した人たちが失われていってからでは遅いのです。

二度と戦争の惨禍に巻き込まれることがないように。

私たちは、「無関心」でいる場合ではないのです。

○今こそ「平和の種」を蒔く

佐藤　花

「俺の兄貴は、沖縄で戦死したんだよ。」昨年の夏、いつもは戦争の話をしない祖父がぽつりと話しました。祖父の家の仏壇には、軍服姿の祖父の兄茂・大伯父さんの写真が飾られています。茂・大伯父さんは、歩兵第32聯隊（**編注**・旭川第24師団隷下の聯隊で、兵の大部分が北海道の出身であり、素質は純朴剛強の上、長く満洲ウスリー方面で猛訓練を経てきた闘志満々の精強部隊であった。沖縄戦の首里防衛戦、特にいわゆる五・四攻勢では勇戦敢闘、古豪聯隊長北郷（ほんごう）格郎大佐指揮の下、第一大隊長伊東孝一少佐の優秀・勇敢なる戦闘指揮と将兵の強勇によって、東方戦線の要衝棚原（たなばる）高地の奪還・死守等に勇名を轟かせた。その後も激闘を繰り返し、6月23日、牛島軍司令官と長参謀長が自決し、組織的な沖縄戦終結後も、また、6月30日に第24師団長雨宮巽中将と参謀長木谷美雄大佐が自決した後も、なお国吉地区の洞窟陣地に立て籠り、米海兵師団との間に肉弾戦を展開し、確たる情報のないまま8月15日の終戦後も米軍の降伏勧告に応ぜず、堅固な洞窟陣地に拠って頑張り通した部隊である。その後8月19日、日本兵に護られた米軍情報将校が洞窟の外に来たり、日本軍の代表に会見を求めたため、3日間の休戦を約し、米軍の案内によって伊東孝一大隊長が、当時米軍の捕虜となっていた第32軍の元作戦主任参謀八原博通大佐と会って会談の結果、ようやく終戦を納得し、北郷聯隊長も血気の将校達を説得して、降伏の命を下し、その夜聯隊旗を奉焼し、8月27日の朝、米軍に投降した。実に沖縄戦における困難な激戦を約5ヵ月間戦い通した名誉ある部隊である。）の陸軍兵長として沖縄戦に参加したそうです。なぜ遠く離れた沖縄で命を落とすことになったのか？どんな想いで戦っていたのか？次々と疑問が湧いてきました。私は自らの目で見て、感じて、知りたい、そう思って沖縄を訪れたのです。そこで目にしたものは・・多くの死、そして、残された者たちの癒されることのない傷でした。

「ガマで隣に座っていた親友も爆弾で顔をやられてしまってダメだった・・。私の学友も戦闘や自決で大勢命を落としてしまった・・。」元ひめゆり学徒隊の島袋淑子さんがお話ししてくださいました。荒崎海岸へ向かう細い道を抜け、目に入ったのは一面に広がる青く透き通った海、そこはかつて「ひめゆり学徒隊」の女学生と引率教員がアメリカ軍に追い詰められ、銃撃と手榴弾による集団自決で11名が命を落とした場所なのです。迫り来る敵に怯え、あのゴツゴツした岩場を裸足で逃げ惑った、自分と同年代の女学生たちはどんなに怖ろしかっただろう、どんなに無念だったろう、と海岸に立って海を眺める私の目から涙が溢れました。

北海道稚内市の小高い丘にある稚内公園に建てられた「九人の乙女の碑」の若い女性のレリーフの隣には、尊い命を落とした九名の女性の名前と共に最期の言葉が添えられております。

「もうみんな死にました。私も乙女のまま清く死にます。みなさん　さようなら　さようなら・・」

その交信を最後に伊藤千枝は青酸カリを飲んで自ら命を絶ちました。

樺太で起きた「北のひめゆり事件」とも呼ばれる集団自決の悲劇、それは、終戦後も続くソ連軍の侵攻から北海道への緊急疎開が行われる最中に起こりました。電話交換業務を滞らせ、避難民を混乱させる訳にはいかない、と責任感の強い真岡郵便電信局の女子交換手たちは「決死隊」を組織し、最期の時まで業務を続ける決意を固めました。１９４５年（昭和20年）8月20日、終戦の5日後のこの日、突如、真岡に現れた軍艦の艦砲射撃と上陸してきたソ連兵による激しい銃撃にさらされ、

最期を悟った彼女たちは次々と自らの命を絶って逝ったのです。自決した中に同年代の17歳の女性がいたことを知った私は、「若し私がその場にいたら、彼女たちと同じ『責任を果たすために残る』という決断ができただろうか?」と彼女たちの勇気ある決断に胸を打たれたのです。まだ春の冷たい風が吹く丘に立った私は、眼下に広がる樺太を望む青い海を見詰めていました。

私の中で、遠く2600㎞を隔てた地に生きた少女たち、自らに課せられた責務を果たし自決という選択によって尊い命を落とした二つの悲劇が一つに繋がりました。

あの戦争で命を失った多くの人々、彼らはもっと生きていたかったに違いありません。もっとやりたかった事があったに違いありません。しかし、彼らは死んでいったのです。あれから70年が経った現在でも絶えることのない、自分や他人の命を簡単に奪う行為、たった一つしかない命が次々と失われていく、若し彼らがこの現状を知ったらどう思うだろうか?きっと命を軽視していると思うに違いありません。自分たちが命を擲って護った行為が無意味に失われて行く空しさに涙するかもしれません。彼らの想いに報いる為にも、私たちは彼らの犠牲の上に成り立っているのだということを絶対に忘れてはいけないのです。

私はこれまで、『平和の種』を育てる木を見てきました。その一つ一つには、様々な果実が実ります。「過去への後悔」、「戦争への恐怖」、「平和への願い」、全てに共通しているのは、たった一つしかない命を大切にして欲しいという想いです。遠い沖縄で命を落とした茂大伯父さんもきっと、同じ想いを抱えながら死んでいったに違いありません。多くの方から受け取った果実に共通した種、今度は私がその種を蒔きたいと思います。

○最後の時に

佐藤　花

（2015年3月28日）

「怖いよー、助けてー、お母さーん!」大きな衝撃を受けた船は僅か10分で沈み、灯りの無い船内を逃げ惑った800名の子供たちは、夜の真っ暗な海に沈んで逝ったのです。

太平洋戦争の末期、各地で敗戦を重ねた日本は、戦闘の邪魔になる女性、子供、老人約8万人を沖縄から本土へ疎開させる計画を立てました。心配する親たちが見送る中、「ヤマトへ行けば汽車にも乗れるし、雪も桜も見ることができる」と本土への期待と憧れではしゃぐ子供たちを乗せ、「対馬丸」は他の2隻の疎開船と共に護衛艦に護られ、長崎へ向けて出港しました。

そしてあの夜、子供たちの夢と希望は、アメリカ軍の潜水艦の攻撃によって永遠に失われたのです。

「このことは、悲劇として終わらせちゃいけないの。」沖縄県対馬丸記念館の外間邦子さんは話されました。当時5歳の外間さんには、小学5年生と3年生の二人の姉さんがいました。幼い外間さんは両親と共に沖縄に残り、二人の姉さんは対馬丸に乗って帰らぬ人となりました。戻ってきたのは姉の名前が書かれたボロボロになったランドセル、たったそれだけ・・記念館には他にも遺品が、遺影と共に並べられています。「若い人たちには、この悲劇から前を向いて生きることを学んで欲しい。」優しい笑みを浮かべ、最後にそう話してくださった外間さん、彼女の目には、姉たちを殺した者に対する怒りや憎しみではなく、私たち未来のある若者に対する期待と願いが満ちていました。私は、「勉強したり、遊んだり、まだまだやりたいことが沢山あっただろうに」と、未来を奪われた子供たちの無念さを想いました。そして、いつも、「どうせやってもできない」と諦めてしまっていた自分が情けなくなりました。

「あの子は元々頭が良いからでしょう。どーせ、私がやってもできないから、やるだけ無駄だよねー（笑）」友人がしていたこんな会話、小学校、中学校、そして高校、思えばこれまで何度同じような会話を耳にしたことだろう。最後まで努力しないで諦める。それでいて現状に不満を漏らし、他人を羨んでばかりいる。そんな人は多いのではないでしょうか?

カカオ生産の7割を占める西アフリカ、国際熱帯農業研究所の調査から、カカオ農園で労働する子供が約28万人もいることを、海外研修の事前学習に取り組んでいて知りました。子供たちは、「医者になって人を助けたい。」と願ったとしても、労働のため学校へ行けず、教育を受けることができません。彼らに夢を叶えるチャンスさえ与えられていないのです。それに比べ、私たちはどうでしょう。家の手伝いをさせられることも少ないのに、面倒な勉強はしないで、テレビやゲーム、携帯で遊んでばかり、夢はあっても叶えるための努力は惜しむ。「今を大切にする」、「一生懸命生きる」、どこかで一度は聞いたことのある言葉、しかし、改めて考えてみると、私たちは普段そのことを、あまり意識していないのではない

でしょうか？

私たちは、自分の身近な所だけを見て、それが当たり前のことだと思ってしまいます。しかし、私たちの当たり前は、本当に「当たり前」なのでしょうか？思い出して下さい。対馬丸や西アフリカの子供たちのことを。彼らは、勉強をしたくてもできないのです。少し視野を広げるだけで、私たちの「当たり前」が「当たり前ではない」ということに気付かされるはずです。私たちには、夢が叶えられるチャンスがあります。「やっても無駄」と初めから結果を決め付けてピリオドを打つのではなく、恵まれた環境にいることを感謝し努力することで、変わることができるかもしれないのです！

「どうせやってもできない」と、最初から諦めていた私、でも、この学校に入学し、沢山の人たちと出会い、語り合い、自分は恵まれた環境にいるのだと気付かされる日々を過ごし、少しずつ考えが変わってきた気がします。私は人生最後の時に「私は一生懸命生きた」と思えるようになりたい。だから、諦めずに前を向いて努力し続けようと思います。諦めるのはもったいない！

特攻隊に関する新聞記事の紹介

今年は、戦後70年の節目の年ということで、新聞やテレビ等で特集記事や番組等が数多く報道・放映された。その中で、9月24日付け京都新聞の夕刊紙面に「語り残す戦争の記憶」と題して、元台湾人日本兵で、横浜市在住の呉正男氏（当顕彰会の会員であり、戦時中、東京の旧制中学校に留学中の昭和19年4月、陸軍特別幹部候補生を志願して入隊し、同年12月末、茨城県西筑波の滑空飛行第1戦隊に配属され、輸送用大型グライダーを牽引して南方又は沖縄に出撃する爆撃機の通信士となり、昭和20年5月に北朝鮮の宣徳飛行場に移って訓練中終戦となり、ソ連に抑留され、カザフ共和国の収容所で2年間重労働に服して、幸い無事復員した後も、日本に留まり、大学卒業後は、信用組合「横浜華銀」理事長や横浜台湾同郷会最高顧問等の要職にあって日台間の友好交流に努める等活躍された。―会報『特攻』第102号（平成26年11月発行）参照）のインタビュー記事が掲載された。また、7月29日～8月1日の産経新聞に、戦後70年の特集記事として取り上げた「特攻」第2部の中に、去る4月6日、90歳で亡くなられた知覧特攻平和会館の初代館長・板津忠正氏に関する記事が掲載（8月1日）されたので、それらのコピーを次に掲載する。

2015年(平成27年)9月24日　木曜日　（夕刊）　京都新聞

語り残す 戦争の記憶

元台湾人日本兵で横浜市在住の

呉（ご） 正男（まさお）さん（88）

「日本人」として志願入隊

日本統治下にあった台湾・台南州斗六街出身で、1940年秋に改姓して「大山」と名乗り始めた。東京の旧制中学に留学中の44年4月、旧陸軍に志願入隊した。既に「転戦」「玉砕」と報じられ、戦局は明らかに悪かったが、日本人として日本のために、と考えていた。剣道で鍛え、硬派な愛国少年だった。

44年の12月末、茨城の滑空飛行第1戦隊に配属され、爆撃機の通信士を務めた。敵の飛行場に強行着陸する滑空歩兵が乗った大型グライダーをえい航する役目。45年5月に朝鮮半島北部の宣徳飛行場に移り、夜間離着陸訓練を繰り返した。

45年7月、飛行場の神社に集められ、「志望」「熱望」「熱烈望」と記された紙切れを渡された。特攻への意識調査だ。既にあちこちで特攻隊の報道があったので、「順番が来たな」と思い「熱烈望」に丸を付けた。

でも長男だったため特攻隊には選ばれずに終戦を迎えた。雑音が入った玉音放送は「ソ連が参戦したからもう一踏ん張りしろ」と鼓舞しているように聞こえた。でも「独立万歳」と喜ぶ朝鮮の人の様子で敗戦を悟った。命が助かったんだと思った。

いったん平壌飛行場に移動し、南下する途中でソ連兵に捕まった。列車で23日間も走り続け、到着したのは半砂漠のカザフ共和国（現カザフスタン）にある収容所。2年間、重労働させられた。収容所では食事の量が少なかった。かゆ状のご飯を一口でも多くもらうため容量を増やそうと、食器の飯ごうのふたをたいて延ばした。実際に増えたかは分からないが。60㌔あった体重は復員時には40㌔に減っていた。

抑留生活を経て47年7月14日、京都・舞鶴港に復員し、旧陸軍大山正男兵長から呉正男に戻った。思考も全て日本語なのは今も変わらない。実戦には投入されず、銃も撃っていない。戦争で苦労された方々と比べれば私はラッキーだった。　＝随時掲載します。

当時を語る元台湾人日本兵の呉正男さん＝5月、横浜市中区

台湾人日本兵　1895年の下関条約で清朝から割譲された台湾は、太平洋戦争終戦まで約半世紀間、日本に統治された。厚生労働省によると、台湾人20万7183人が日本軍の軍人・軍属として出征し、3万306人が死亡した。

特攻 戦後70年 第2部

▶▶ 4

「戦友の思い伝えよう」

90歳まで生き抜いた知覧の〝顔〟

5月3日、鹿児島県の知覧特攻平和会館で、61回目の戦没者慰霊祭が開かれた。時折激しく降る雨の中、遺族ら約1千人が参列したが、その中にいるべきはずの人の姿がなかった。

元陸軍特攻隊員で知覧特攻平和会館の初代館長、板津忠正さんだ。毎年必ず慰霊祭に参列、知覧特攻の〝顔〟でもあったが、慰霊祭を1カ月後に控えた4月6日、慢性心不全急性増悪のため90歳で亡くなった。

× ×

筆者が初めて、板津さんに会ったのは十数年前。遺族らを相手に、身ぶり手ぶりを交えて出撃を控えた特攻隊員の様子を再現する張りのある声は今も耳に焼き付いている。

「250キロ爆弾を抱えた特攻機は（滑走路の）端から端までいってようやく浮き上がり、上空で編隊を組み、下で見送る整備士、住民に翼を振り開聞岳の方向に飛び去った」

「出撃命令が出ると、兵舎内は緊張感がみなぎり、最後の便りをしたためている者や瞑想にふける者もいた」

気がつくと、板津さんの周りには幾重にも人垣ができ、戦争を知る者も、知らない者も耳を傾けていた。よどみない板津さんの言葉を目を閉じて聞いていると、出撃を間近に控えた特攻隊員の生活が目に浮かんだ。

その後、何度か長時間にわたって話を聞いた。常に笑顔を絶やさないが、特攻隊の話を始めると眼光が鋭くなり、好々爺の印象は消えた。

板津さんは、民間のパイロットを目指していたが、戦況が逼迫すると、大刀洗飛行学校（福岡県）などを経て特攻要員となり、昭和20年5月28日、第213振武隊の一員として12人で知覧を出撃、沖縄を目指した。

『靖国の戦友に遅れはとらじとて　我も散らなむ沖縄の沖』

出撃を控えた板津さんが詠んだ句だ。だが、途中でエンジントラブルを起こし、徳之島に不時着。知覧に戻り、その後、2度にわたって出撃命令を受けたが、天候が悪く、いずれも出撃が中止された。

「自分が死なければ日本は本当に救われないのだと、信じている者もたくさんいた。血書まで書いて志願した者もいたぐらいだ。私も『国のため、肉親のために死ねる』という満足感があった。出撃できることに感激していた」

板津さんは思いの丈をはき出すと、こう続けた。

「結果として生き延びてしまった。水杯を交わし、必ず敵艦を轟沈して靖国神社の鳥居の下で待ち合わせてから入ろう、と約束したのに、なぜ自分だけが生き延びてしまったのか、と悔やむ日が続いた。生き延びたという負い目は死ぬまで消えません」

× ×

長男の昌利さん(58)は中学生のとき、初めて父親に特攻隊について尋ねた。

板津さんはこう答えた。

「250キロ爆弾を機体に抱いて敵の艦船に突っ込んでいくんだよ。お父さんたちがやらないと、日本が負けてしまうという思いだけで、とにかく、お国のため、家族のためにやるんだという思いだけで、怖いとかは全然感じなかった」

昌利さんは父親の思いをこう推し量る。「知覧に戻った後、戦闘指揮所に出撃させてくれと日参したと話していた。自分だけが死ねなかったという負い目が非常に強かったことだけは間違いない」

生き延びたという呵責に追い詰められる板津さんの人生を変えたのは知覧で食堂を営み、特攻隊員を見送り続けた鳥濱トメさん（平成4年死去）の一言だった。「あなたが生かされたのは、何か意味があって生かされたんだよ」。この一言が板津さんに生きることへの使命感を与えた。

昌利さんはこう振り返る。「おやじが亡くなって初めて、おやじのことをあまりにも知らな過ぎたことに気づいた。おやじは戦友の分まで生き抜き、戦友の思いを伝えようと決めていたのだと思う」

（編集委員　宮本雅史）

陸軍特攻隊員だった故板津忠正さん（長男の昌利さん提供）

3面に続く

特攻

「仧間の御霊が背中を押す」

1036人の遺影探して全国行脚

1面から続く

復員した板津忠正さんは約2カ月かけて、愛知、長野、石川県の遺族を訪ねている。自分が生き残ったことをわびるためだった。その後、名古屋市役所に勤めたが、全国の遺族に特攻隊の真実を伝えながら遺品や遺書を集めようと思い立つ。戦後、変化した社会風潮に危機感を持ったからだ。

「特攻隊に対して『犬死にだった』『無駄死にだった』と偏見が多くなった。中には『殴られるのが嫌で志願した』と特攻隊員の心と死を冒瀆するようなことを平気で言う人もいた。それが許せなかった。特攻隊の死は無駄ではなかったんですよ。風化させてはいけない、後世に伝えなければいけない、と気づいた」

厚生省（当時）の戦没者名簿を手がかりに全国の遺族にはがきを書くことから始めた。1年間に360通書いたこともある。「いまさら、慰めは結構です。弟は帰ってきません」「二度と手紙をくれるな」。傷ついた気持ちが癒やされていない遺族からの返事もあった。それでも返事をくれた遺族とは文通を続けた。

昭和54年、板津さんは定年を待たずに名古屋市役所を辞める。全国行脚をして遺書や写真を集めることに集中するためだった。退職金はすべてこれに使った。

「死んだ仧間の御霊が背中を押しているような気がした」

北海道から九州まで、車を運転して訪ねて回った。北海道では34人の遺族を探し出そうと、40日間かけて道内を車で走った。戦没者名簿を頼りに一軒一軒確認して回り、34人中30人の遺族を探し当てた。3年間で10万キロ走った。

息子が全員戦死して一家が断絶、仏壇をお寺に預けている遺族がいた。遺書や手紙を焼いてしまった遺族も多かった。遺族から遺言や絶筆、遺品などを借り、コピーした。遺影はカメラに収め、ネガにした。

× ×

一通り全国行脚を終えた59年、知覧の特攻遺品館の事務局長として維持・管理に携わり、特攻平和会館が建設されると、初代館長に就任するが、63年に退職。遺影のない戦友の遺族を求めて再び全国行脚に出た。

「平和会館が開館した頃は、まだ384人の遺影が見つかっていなかった。写真がなく空白のままになっている隊員が『早く家族を捜してくれ』と私に訴えるんです。一緒に出撃した隊は同じ所に展示しているから、空白の隊員から『早くここを埋めてくれないと俺たち寂しいじゃないか。お前がやらないで、だれがやるんだ』と叱られるような気がして、いたたまれなかったんです」

1年のうち7カ月、家を空けたこともあった。平成6年、ようやく1036人全員の遺影がそろう。終戦から49年、名古屋市役所に勤務しながら遺族と接触を始めてから20年が経過していた。訪ねた遺族の数は800人を超えた。1036人の名前と所属、そして遺書をそらんじることができるまでになっていた。

生前、インタビューに応じる板津さんからは、特攻隊員が乗り移ったような気迫さえ感じた。

「平和会館は特攻隊の真実を語るだけでなく、自分を見つめ直す場所、改めて平和の意味を考える場所なんです。今の日本は平和すぎるぐらいに平和なのに、社会はどこか殺伐としている。だから、なおさら平和会館は大切な場所なんです」

板津さんの長男、昌利さんによると、板津さんは講演会などで「どうしたら平和になるかは教科書には書いていない。昔、戦争があり、特攻があり、その上で今の平和の世の中がある。過ちを繰り返してはならない。若い方がきちんと理解した上で、次の世代、次の世代へと伝えていかないといかん」と繰り返していたという。

昭和26年、板津さんは久子さん(85)と結婚した。夫婦は板津さんが亡くなる直前、テレビの取材を受けているが、板津さんはその中で、妻にこう最後の言葉を贈っている。

「死ねなかった屈辱と戦った70年だった。だが、生き残って本当に良かった。生き残ったから一緒になれた。本当にありがとう」

× ×

元特攻隊員はそれぞれ複雑な思いを胸に戦後を生き抜いてきた。

ある元海上自衛隊幹部は「戦没した英霊は、平泉で仁王立ちになって義経を守った弁慶のような存在。今も日本を守ってくれている。『忘れない』『感謝します』『努力します』『安らかにお眠りください』が基本だ」と念を押した上でこう警鐘を鳴らす。

「敗戦を客観的に分析し、評価し、教訓を学び取っていかないといけない。70年はそういう年にしないといけないがしていない。していないことにも気づいていない。亡くなった人の思いを生かして生きていくのがわれわれの責務だ」

特攻隊をテーマに取材を進めると、平和を享受して今を生きる私たち日本人は、護国という大義のため自らの命をささげた特攻隊員の思いと、彼らが背負っていった当時の日本人の思いも背負っていることに気づく。英霊に対する感謝、顕彰はもちろんだが、それ以上に継承、そして自問自答を迫られているような気がするのである。

＝第2部おわり

旧知覧飛行場の三角兵舎跡で出撃当時の模様を語る故板津忠正さん　（長男の昌利さん提供）

特攻名簿「村山光一」について
（資料報告受領の手紙
―村山光一の甥）

会員（遺族）　村山　公一

（編注・平成27年9月23日（水）、秋分の日に執り行われた第64回特攻平和観音年次法要の直会の席で、御遺族の村山公一氏から、先号の『特攻』第106号に掲載された、編集人執筆の「日本海海戦百十周年記念式典に参列して」の記事中に、福岡県宗像郡の宮地嶽神社について書かれているが、「実は、特攻戦死した叔父村山光一（昭和19年12月20日、フィリピン・ミンドロ島サンホセ沖の米艦船に突入、これを撃沈して散華された精華特別攻撃隊員村山光一軍曹・少飛10期）が大刀洗陸軍飛行学校に在校中の昭和16年8月に、福間町（現福津市、宮地嶽神社の鎮座する津屋崎町と合併して、福津市となる。）海岸での遊泳演習時、宮地嶽神社に参拝しており、その折の郵便はがき等があり、大変懐かしい想いがした」とのことで、はがきの写しやその時の写真などが掲載されている、少飛十期会の会報『ひとみ』47号（平成6年5月発行）と叔父上が操縦訓練を積まれた陸軍九七式戦闘機に関する論稿を持参された。それらの資料のうち、郵便はがきと会報『ひとみ』47号に掲載された写真、及び叔父村山光一軍曹が、各種特別攻撃隊に関する書籍、名簿等に「杉浦光一」と誤って記載されており、その訂正のために同期の方々に大変お骨折いただいたことへの感謝の手紙を掲載させていただいた。なお、「陸軍九七式戦闘機」と題する論稿は、別項として掲載させていただいた。）

村山飛行兵

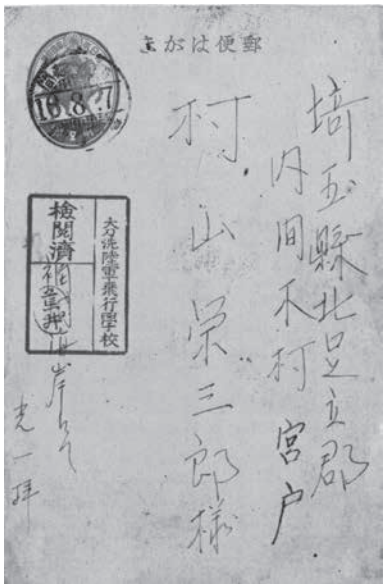
宮地嶽参拝記念（昭和16年夏）
大刀校福間海岸遊泳演習時第３区隊の一部

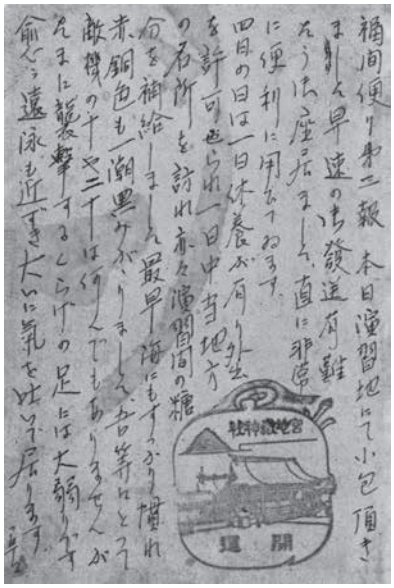
◇

謹啓、朝晩は、めっきり冷えてまいりました。本日二十九日勤務を終え帰宅、松川様よりの御便りが机の上に置かれてありました。

嬉しく直ちに開封、貴重で膨大な資料の数々に圧倒され、目を大きく見張るばかりでした。改めて叔父の名前が記載されるまでの、ご努力に厚く厚く御礼を申し上げます。

小生が恥を覚悟で各慰霊祭に出席させて頂いたのも、実にこの一点にありました。





つまり昭和の時代、ほとんどの特攻物の出版物が参考文献として巻末に挙げていた、文藝春秋刊「陸軍特別攻撃隊」、ビジネス社刊「陸軍特別攻撃隊史」の双璧の二大書物に故光一叔父の名が無かったことです。

文藝春秋書では更に新装版、文庫版と版を重ねましたが、遂に伯父光一の名前は一字も出ていませんでした。菊地寛賞受賞作品であるこの書に無かった事は本当に残念でした。

十期の村岡義人さん

は百回以上は出ている事を思うとその不遇に泣きました。しかし生田様の書は、その後広く名前の訂正等の改良を重ね、遂に近年国史刊行所刊「写真特別攻撃隊」特攻慰霊顕彰会編「特別攻撃隊」の正確な名簿が出るに至ったのだと思います。

この影には松川様始め同期の方々、戦隊の方々の並々ならぬ御努力があった事は決して忘れないでしょう。特に松川様の御努力は、今日同封致しました千代伯母の書状を何時も読んで判りました。

この書状は昭和五十三年六月七日発信ですので、既に十四年も前に、松川様に届いていなければいけない物でした。残念ながら戻って来たものです。千代伯母も今年三月亡くなり時代の移り変わりを、つくづく感じています。

顕彰会編「特別攻撃隊」が刊行された時は、小生の喜びは大きなものでした。初版本を予約で求めた程でした。現在では三版を重ね名簿もますます正確となっていると聞いております。

あの時は佐藤彰平さん（新潟市出身少飛会役員）や、今川武司さんに小生の喜びの気持ちと感謝の気持ちを手紙にしたため、松川様には以心伝心で必ず判って下さっていると信じておりました。

その後の特攻慰霊祭の後で、佐藤様や生田様、その他の遺族の方々と九段会館で会食の機会がありましたが、過ぎ越しかたが色々思い出され感無量となりました事を覚えております。

意のまま乱筆いたしましたが、筆力足らずで感謝の気持ちを十分お伝え出来なかった事をお許し願います。いずれ又、向寒の折柄御自愛の程お願い致します。

改めてここに杉浦光一を訂正し、村山光一を記入された事を御礼申し上げます。

敬　具

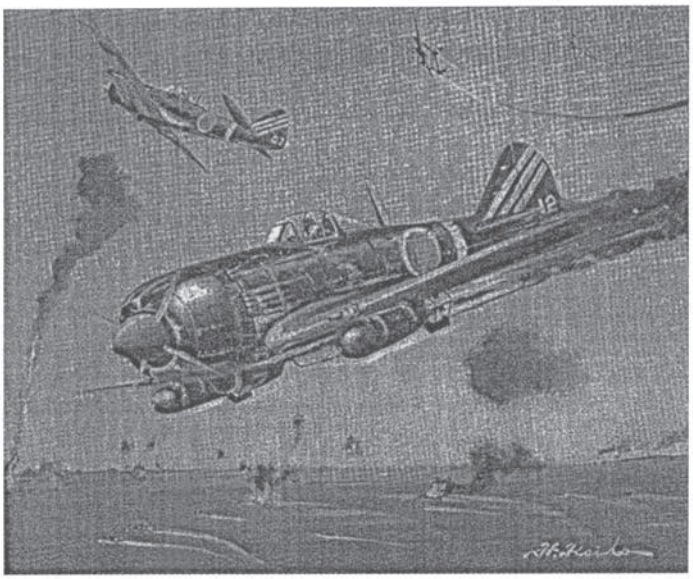
平成四年十月二十九日夜

村山公一

松川治雄様

◇

精華特別攻撃隊敵艦に突入!!



精華特別攻撃隊の村山光一軍曹（少飛10期）は、昭和19年12月20日ミンドロ島サンホセ沖の敵艦船攻撃に向かい、P－38の攻撃を受け火達磨となったが敵艦に突入これを撃沈した。左上の掩護機は久永博軍曹（少飛7期）であるが、同軍曹も敵駆逐艦に突入してこれを轟沈した。

陸軍九七式戦闘機について

会員（遺族）　村山　公一

今年平成27年は、終戦70周年の節目の年である。戦時中戦闘機パイロットであられた方々も、一番若かった方でさえ、90歳前後になられた。10年後には百歳になられる計算である。

先の大戦に関しては、元一兵卒から元将官に至るまで、各層の人々による膨大な数の戦記物が出版された。

ところで、過去の日本の歴史上、重要な戦いを描いた戦記物として『平家物語』がある。これが完成された年については諸説あるが、大体１１２１年の承久の変の数年後だろうという説が多い。とすれば保元、平治の乱から70年ぐらい経ってから、作者不明で世に出たことになる。言わば、平治の乱70周年の出版物のようなものと、勝手に想像しているのである。当時20歳前後で、最前線で戦った兵士も、90歳前後になっていたはずである。平均寿命が遥かに短かった当時の事とて、健在者は殆どいなかったと思う。また、情報の少なかった時代であってみれば、内容にどれほどの信頼性があったかは分からない。

それに比べれば、先の大戦の資料の数は、全く比較の対象にならない膨大さである。そのうちの一つに過ぎない特攻という分野の切り口から見てさえも、それは非常に多いのである。

少し戻るが、鎌倉時代末期の武蔵の国の武将金子十郎家忠は、弓の三大現場に居合わせている。平治の乱における強弓の源為朝、屋島の戦いにおける扇の的の那須与一、そして自らが衣笠城で、後の鎌倉侍所の別当になる和田義盛の放った矢を顎に受けたこと等である。現代ならばさしずめ自戦記でも書けそうな戦歴である。かなり長生きをしたのだが、承久の変の数年前に亡くなってしまった。『平家物語』の成立した年代によっては、金子十郎がこれを読んだ可能性は皆無ではない。

前置きが長くなってしまったが、本題に入ろうと思う。

陸軍九七式戦闘機は、ノモンハン事変で活躍したことで知られる。格闘戦闘に優れていたので、陸軍の次期制式機がなかなか決まらなかった。後に一式戦闘機「隼」となる試作機番号キ―43は、既に早い時期に初飛行したのだが、軍部は、これの採用を躊躇していた。一つには、現場の操縦者の間で、九七戦の旋回性能の良さを捨て切れなかったこともある。旋回性能とスピードとは背反する能力であり、キ―43は中途半端と見られていた。だが、ドイツの戦闘機との模擬空戦の結果が良かったことで様相は一変する。陸軍は急遽、キ―43を制式化することに決定した。そして、遅ればせながらキ―43は一式戦闘機「隼」として誕生したのである。しかし、同じ栄エンジンを搭載した海軍の零式戦闘機は既に量産体制に入っていたのである。開戦時保有数において、陸軍の隼は、海軍の零戦に対して大きく遅れをとってしまったのである。これもある意味で、九七戦の優秀性を物語っているものかもしれない。この遅れは惜しまれる。アメリカの陸軍航空の巨大さを考えた場合、一刻の猶予もならなかった筈である。若し、昭和16年制式採用された一式戦「隼」が1年早く採用されていれば、呼び名も百式戦闘機「隼」となっていた筈である。昭和15年は皇紀二千六百年で、この年に制式化された航空機は、海軍では零式、陸軍では百式と呼ばれたからである。

アメリカ陸軍ではその後、戦闘機で大型強力大馬力エンジンを搭載したP―38、P―47サンダーボルト、P―51ムスタングなど、そして、爆撃機ではB―25、B―29などが立て続けに量産体制に入っていった。B―29などは延べ4千機も生産し、そのうちの三百数十機に襲われた東京は、一夜にして灰燼に帰してしまった。余りにも巨大なアメリカ陸軍の航空戦力であった。

因みに、アメリカ海軍では、エセックス級の空母を二十数隻建造し、戦争末期には、日本近海に出現し、空と海の戦力が無力に等しくなった日本軍を尻目に、最新鋭の艦載機が跳梁跋扈して暴れ放題であった。あのカミカゼ特攻隊でさえ、このエセックス級空母は一隻も沈めることができなかったのである。これも、余りにも強大なアメリカ海軍の戦力であった。

それでは、村山光一軍曹が、何時何処で九七戦と関わりがあったかの検証に入ろうと思う。

来る8月16日、テレビ朝日で「妻と飛んだ特攻兵」が放映される。これは満洲で、九七戦を装備した特攻隊「神州不滅隊」が、昭和20年8月19日に出撃した時のことに関するエピソードを描いた小説のテレビドラマ化である。

これとは関連がないが、村山軍曹もこれより約2年程前、九七戦で満洲の広大な空を飛んだという事実がある。これは、村山軍曹と軍歴が良く似ていらっしゃる少飛十期生の松川氏が同期生会誌にお寄せになった一文の中に見付けることができる。

台湾第百部隊にいた百数名の同期生

のうち18名は、昭和18年4月、朝鮮の連浦にある朝鮮第一一教育飛行聯隊に転属を命ぜられた。この中には、後に日本機を38機撃墜したアメリカ空軍のエース、マクガイアー少佐機をフィリピン上空で撃墜した福田兵長も含まれていた。連浦では、教育飛行隊で訓練に励んでいた。少飛十期生は、8月1日付けで伍長に任官したので、満洲を飛行した時は、まだ兵長、待望の下士官になる10日前のことであった。

松川氏が「奉天空輸」と呼ぶこの飛行は、九七式戦闘機を満洲の奉天から新義州、平壌を経て連浦まで空輸するという任務であった。満洲には、満洲飛行機製作所という会社があり、九七式戦闘機も製作していた。恐らくはここで製作されて工場出荷されたばかりの、銀翼ピカピカの新品の九七戦だったに違いない。空輸人員は、少年飛行兵十期の松川兵長、村岡兵長、村山兵長、他の同期生1名の4名1組であった。往路は列車を利用した。連浦から奉天までの列車の中では、少年飛行兵ではない他の組も一緒だった。

奉天には多くの日本人の軍人、民間人がいた。4人は任務開始までの短い数日間、心ゆくまで町を楽しんだ。満軍十期生と久し振りの再会も果たした。東京陸軍航空学校卒業以来の同期生もいた。お互いが成長した、ひとかどの軍人の証しのように、きりりとした挨拶を交わした。もっとも直に同期生らしく大いに頬がゆるんだのであった。少飛二期の先輩の下宿先も訪れ、歓待を受けたのである。4人は町にも出て飲んだと書いてある。この時別の組の福田兵長も奉天にいて、松川氏の叔父宅を訪れたことが、松川氏の叔父から松川氏宛のハガキに書いてある。

やがて、いよいよ奉天空輸任務の当日が来た。4機の九七戦は、次々に奉天飛行場を離陸した。

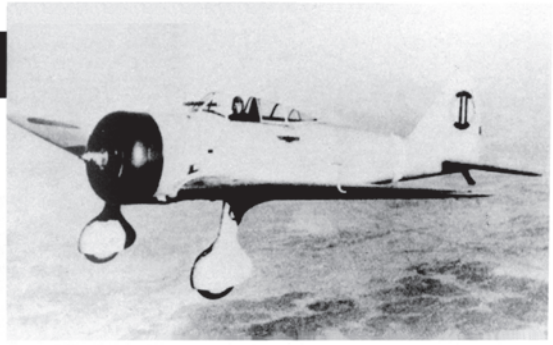
ここで、松川氏の文の一部を引用させていただくことにする。

「今でも目をつむると、広大な地、黄色の海、密林におおわれた長白山脈、そして、長くうねる鴨緑江が浮かび上がって来るのである」

この時、村山兵長も同じ時間、空間を共にしたので、同じ記憶を後年まで共有し続けたに違いない。無事に奉天空輸を終えた4機の九七戦は連浦飛行場に帰着した。時に昭和18年7月21日夕刻であり、村山光一軍曹戦死のちょうど1年5ヵ月前のことであった。

さてここでもう一つ、村山軍曹の九七戦との関わりを見てみよう。むしろこちらの方が、特筆されるべきかもしれない。何しろ台湾での4ヵ月の間、

九七式戦闘機



Spec
97式戦闘機乙
全長×全幅：7.53×11.31メートル
自重：1,133キログラム
乗員：1名
発動機：中島97式空冷870馬力
最高速度：時速470キロ
航続距離：最大1,710キロ

格闘戦に優れる軽戦闘機

日中戦争時の陸軍の主力戦闘機が九七式戦闘機である。この機体最大の長所は、軽さが生み出す圧倒的な格闘性能だった。

昭和十四年に勃発したソ連との国境紛争・ノモンハン事件では、ソ連軍のポリカルポフI15、I16などの戦闘機を格闘戦で葬り、大きな戦果を収めている。これ以降、日本陸軍では格闘戦に優れる軽戦闘機こそが最強だという考えが顕著になり、後継機「隼」の開発にも大きな影響を与えることになった。

九七式戦闘機の開発は昭和十年にスタートした。同機の特徴は単葉（一枚翼）なのに複葉（二枚翼）並の性能を持った翼を与えられたことだった。究極の格闘性能をもって誕生した九七式戦闘機だったが、太平洋戦争が始まった頃には速力、航続力、武装などの不足が指摘されるようになり、主力戦闘機の座を「隼」に譲って第一線を退いた。そして沖縄戦が始まると特攻機として第一線に復帰した。

来る日も来る日も九七戦に乗っていたのだから、関わり合いは深かったと言えるだろう。

「村山は屏東の一番」

松川氏の文章の一部である。私なりにこの文章の意味を「村山は屏東での九七戦の操縦技量が一番の成績である」と勝手に解釈している。

昭和17年11月13日に大刀洗陸軍飛行学校隈之庄分教所で基本操縦課程を終えた十期生は一旦それぞれの原隊に復帰した後、（村山の場合は仙台飛行場名取・平成11年大津波が仙台飛行場を襲った映像は今なお記憶に生々しい）11月19日の門司集合までは休暇が与えられた。誰もがどんなにこの休暇を待ち望んだことだろう。松川氏はこの時故郷の新潟に帰り、戦死した実兄の遺骨受領の奇縁に会うことができた、と述懐されている。村山兵長も志木に帰省したに違いない。宮戸で写した写真はこの時のものかもしれない。小生の父も他の兄弟と一緒に写っている。村山稲荷、敷島神社にも参拝したはずである。

仙台から志木へ来た時は、嵐山町出身の同期生長島四郎兵長（後に軍曹。フィリピンの空中戦で戦死後、陸軍曹長）と一緒に東上線に乗ったのかもしれない。この約1年後に宇都宮陸軍飛行学校にいた松川伍長に出した手紙の中で「村山は何処にいるかな、貴殿などは家に近いな、俺はまだ昔の所だ」と、強烈な望郷の思いを綴っている。私は2度程長島軍曹の墓参をした。東上線の武蔵嵐山駅からバスに乗ると間もなく穏やかで純朴な農村地帯になり、故郷の生家の近くで長島軍曹は静かに眠っていた。どんなにかこの故郷を思い続けていたかを考えた時に万感胸を塞ぎ、目を転じると、そこには、長島軍曹も見たと思う広大で豊かな稲穂の波が、真夏の風に揺られてかすかになびいていた。なお、このバス路線が近年廃止されてしまったのが残念でならない。

11月20日、いよいよ門司港出港である。3千トンの「宇品丸」という船であった。飛行兵を一度に多数乗せるのもよく分からない。一人を育成するには多くの費用と時間が掛かったはずである。終戦までまだ2年以上あるというこの時期、台湾海峡は既に安全ではなくなっていた。村山兵長は、この時出した小生の父宛のハガキで「八風吹けども動ずることなし。光一は栄兄を絶対に信頼していますとお伝えください」と、書いている。宇品丸を含む船団は、台湾の高雄港を目指して航行した。宇品丸は低速のため、のろのろと後ろを進んだが、先航した船団の中では、敵潜水艦のため撃沈されたものもあった。どうしてもっともっと強力な護衛を付けなかったのか。艦隊決戦よりもシーレーンを守る方がよほど大事だったと思うのである。

台湾とフィリピンとの間のバシー海峡では、更に犠牲が多かった。

その後も兵員輸送を続け、フィリピンが孤立する19年末までに10万人以上の兵士が戦う前に無念にも海没してしまわれたのである。

雑誌「正論」の最近号に、バシー海峡を望む台湾の最南端にあるお寺で来たる8月2日に慰霊祭が行われるという記事が載っている。

あーあー堂々の輸送船、さらば祖国
よ栄えあれ

台湾に渡った少飛十期生は、4個中隊に分けられた。各中隊27名ずつで編成されていた。村山兵長は屏東にあった第二中隊に所属した。ここで九七式戦闘機による猛訓練が連日行われたのだが、たまの休日には町にも繰り出したようである。手紙にはバナナなどが豊富にあると書かれている。数ヵ月の猛訓練で九七戦に相当習熟できたものと思う。私見ではあるが、村山兵長は小柄であったため、九七戦とは相性が良かったのではないかと思う。

そして前述のように、朝鮮第一一教育飛行聯隊に転属を命ぜられた28名は、18年4月29日、台湾高雄港を出港した。今度の船の名前は、「うすりい丸」であった。しかし、今回は敵の魚雷のペラの部分で船体の一部を齧られてしまい、破孔が出来てしまった。海水がどんどん入り込んできた。幸い破孔は小さかったので、松川兵長を主力に、坪井兵長、村山兵長が協力してこの孔を塞ぐのに成功した。この時、輸送指揮官から、3人はよく頑張ったとして通信紙に書かれた賞詞と褒美をもらった。

この時の詳しい模様は、松川氏が、少飛十期生会会報『ひとみ』に寄稿されている。

エピローグ

平成27年7月現在、世界で唯一現存する陸軍九七式戦闘機は、かつて東洋一と謳われた広大な旧陸軍飛行場の跡地の一部に建てられた大刀洗平和記念館内に展示されている。この地にゆかりのある村山軍曹の遺影も同じ記念館内に掲げられている。ゆかりの九七戦が身近にあり、村山軍曹は、安住の地を得て安らかに眠っていると思うのである。

新刊図書紹介

① 吉本貞昭著『世界史から見た大東亜戦争―アジアに与えた大東亜戦争の衝撃―』

（㈱ハート出版・平成27年7月27日第1刷発行・A5判566頁・定価本体3700円）

著者の吉本貞昭氏は、終戦時市ヶ谷台上において、第一総軍司令官杉山元元帥と共に、敗戦の責任を一身に負って割腹自決された吉本貞一大将の親族に当たる方で、本名は中川　聖氏、当顕彰会の早くからの会員でもある。北海道の出身で、国立大学の大学院修了後、中国留学を経て、約10年間、高校の世界史を担当されたりしたが、現在は旭川大学の特別研究員として在籍。専門分野の中国経済の研究の傍ら、大東亜戦争開戦の原因、その意義・影響等、また、特攻の真実、その戦果、東京裁判の真相、日本国憲法の正体など、幅広い分野について、米国その他の資史料等を丹念に当たって、世界史的な観点から多くの著作を執筆・刊行しておられる。その主なものを参考までに後ろに掲記した。

本書は、大東亜戦争に関する著者の研究の集大成とも言える、幕末から大東亜戦争までを「吉本史観」で読み解いた力作である。特に大東亜戦争の衝撃によってアジア諸国がどのように政治意識に目覚め、民族の自尊心と勇気を取り戻し、民族解放戦争や民族の独立運動に立ち上がったのか、その蔭でこれを支援し、指導した陸軍中野学校出身者らによる知られざる活躍について、藤

"日本人が誇れる"歴史書の誕生

「世界史から見た大東亜戦争」

吉本貞昭著

アジア各民族の独立までの流れを追う

「アジアに与えた大東亜戦争の衝撃」というサブタイトルが付いている本書は、大東亜戦争の終結後、アジアに巻き起こった民族独立戦争に視点を当て、大東亜戦争の意義を再検証している。70年前の日本の敗戦とともにアジア各地で起きた「第2次大東亜戦争」とも言うべき、各民族の独立運動。それを陰から支援した陸軍中野学校出身者たちの知られざる活躍など、従来の歴史理解では見えてこない歴史の真実が明らかになる。

夏になると日本の一部メディアは、中韓と足並みをそろえた反日的な見方で、戦前の日本や「大東亜戦争」を悪として回顧する。この一方的な歴史理解を決定づけたのが、終戦50年の村山富市元首相による「大東亜戦争はアジア諸国に対する侵略」とする、歴史に禍根を残す談話だ。

本書は、アジアが西欧列強に食い荒らされていた幕末日本の明治維新から、日清、日露の戦争、そして大東亜戦争を経て、インド国民軍、ビルマ独立義勇軍、ジャワ防衛義勇軍など、アジア各国の独立運動と日本との深い関わりを詳述。戦後の第2次大東亜戦争によって、アジア各民族が独立を勝ち取るまでの流れを追っている。アジア解放という世界史の視点から見直せば、日本がまいた大東亜共栄圏のタネは着実に実っていると、日本人が誇るにたる歴史書の誕生といえよう。

ハート出版
3700円＋税

世界が語る 神風特別攻撃隊
豊富な資料と数々の証言によって、戦後封印された「カミカゼ」の真実を解き明かし、世界に誇る「特攻」の真の意味を問う。　吉本貞昭 著　1,600円

世界史から見た 日清・日露戦争
侵略の世界史を変えた日清・日露戦争の真実
日清戦争から120年
日露戦争から110年
500年続いた白人中心の世界を叩きつぶし、アジア解放の礎を築いた日清・日露戦争。従来の「日本史」の理解では見えてこない、この戦争の「真実」を、新たな視点で検証する！
吉本貞昭 著　2,800円

東京裁判を批判したマッカーサー元帥の謎と真実
その謎と真実を豊富な資料と証言によって解き明かすマッカーサー研究の決定版。日本のメディアは何を報道し、何を報道しなかったのか。
吉本貞昭 著　1,800円

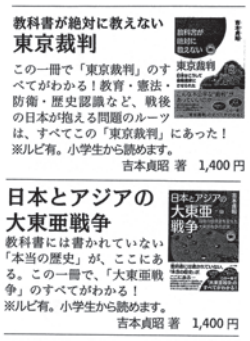
知られざる日本国憲法の正体
占領軍が作った「日本国憲法」その誕生と実像に迫るマッカーサー研究・第二弾！
戦後の日本で固定した間違いだらけの「定説」を覆し、今なぜ「憲法改正」なのかを問う、渾身のノンフィクション。　吉本貞昭 著　2,100円

世界が語る零戦
15世紀以来の西欧列強による植民地支配の歴史に終止符を打ち、アジア諸国を解放して独立に導いた大東亜戦争。
この「侵略の世界史」の大転換に、零戦が果たした「世界史的意義」とは何か。従来の定説を覆し、新たな視点で描いた「零戦論」　吉本貞昭 著　1,800円

世界が語る 大東亜戦争と東京裁判
東條英機元首相の孫娘 東條由布子氏、推薦
大東亜戦争は侵略戦争だったのか？東京裁判は公正な裁判だったのか？私たちの先祖は、何を守り、何と戦い、そして何を勝ち取ったのか。吉本貞昭 著　1,600円

原機関とインド国民軍の真実、南機関とビルマ独立義勇軍の真実、参謀部別班とジャワ防衛義勇軍の真実等詳細に検証している。

なお、8月15日付け「夕刊フジ」にも前掲のような書評が掲記されている。



②　吉本貞昭著『若者たちはなぜ特攻を選んだのか ―日本人が知らない特攻の真実―』

（㈱ハート出版・平成27年10月10日第1刷発行・A5判158頁・定価本体1400円）

本書は、小・中学生のジュニア向けに執筆・刊行された、『日本とアジアの大東亜戦争』、『教科書が絶対に教えない東京裁判』（いずれもハート出版）に次ぐ特攻編で、特攻はなぜ生まれ、いかに戦ったのか、若者たちはなぜ特攻を選んだのか、外国人から見たカミカゼの真実等、小・中学生にも分かりやすく解説された、特攻に関する（学校では絶対に教えない）教科書である。漢字には、全部ルビが付してあるが、内容はかなり多岐にわたっており、充実した内容となっているので、大人にとっても必読の特攻書である。

○株式会社ハート出版
〒171-0014
東京都豊島区池袋3-9-23
電　話03-3590-6077
FAX03-3590-6078

事務局からの報告等

寄附者御芳名（敬称略）

（平成27年7月1日～9月30日）

（単位千円）

一〇〇　下出　忍
一〇〇　萩野　茂雄
二〇　安永真理子　一七　降矢　達男
一〇　松井　敬子　一〇　杉山　蕃
一〇　百目鬼　清　一〇　大穂　利武
一〇　松本　司　一〇　西　正昭
一〇　木下　矩武　一〇　丸井　容子
一〇　上村　貞蔵　一〇　永田　利夫
一〇　吉田　和貞　一〇　岡本　巌
一〇　山根　秋男　一〇　河野　茂義
八　川岸　義視　七　平野　三郎
七　作左部　貢　七　兵頭　春夫
七　竹本　佳徳　七　井川　嘉江
七　西村　米子　七　呉　正男
七　斎藤　正夫　七　三宅　好美
七　藤元　正明　六・5　藤本英憲
五　藤井　日正　五　千葉　孝
五　駒場剛太郎　五　阿部　敏行
五　臼田　智子　五　後藤　賢治
五　樋口　太　五　川井　孝輔
五　飯田　正能　五　杉原　清之
五　茂木　昌三　五　原田里津子
五　波多野義昭　五　植田　和男
五　豊田　志げ　五　水島　章
五　西村　久宣　五　石本登志夫
五　小松　雅也　五　丸原　巧
四　飯田　雍子　四　上田真美恵
三　川田久四郎　三　金子　亘秀
三　岡本　久吉　三　中島　尚史
三　花塚真知子　三　是安　宏昭
三　近藤　博隆　三　櫻井　光夫
三　八巻　邦嘉　三　加藤　千佳
三　久保　巍　三　高須　雪枝
三　小林　信彦　三　水気　博美
三　津覇　実雄　二・65　高橋正美
二　工藤　重民　二　大和　誠
二　関根　賢治　二　高村　正義
二　関　淳人　二　手塚　巌
二　須田　里吉　二　酒寄　和郎
二　石井　敏子　二　衣笠　陽雄
二　小倉　利之　二　長堀　守利
二　谷垣　尚　二　鯨井　優直
二　田中　正和　二　寺井　俊一
二　水町　博勝　二　深山　明敏
二　光安　良一　二　寺井　倶子
二　柴　芳文　二　根本　紘一
二　堀川　淳一　二　佐藤　一志
二　水野　清　二　森ノ内敏巳
二　嶋本　久代　二　高橋吉三郎
二　小泉　朋美　二　吉田　治正
二　西垣　幸三　二　上嶋　正敏
二　川床　剛士　一・23　田村政昭
一　日高　誠　一　岩井　良平
一　夏井　裕輔　一　根木　東洋
一　長谷川知幸　一　大川　吉昭
一　小林　清完　一　日野有希子
一　高橋こすみ　一　財津　甚吾
一　竹添　二雄

御芳志誠に有り難うございました。

◇　◇　◇

新入会員名簿（敬称略）

（平成27年7月1日～9月30日）

北海道　佐藤　花　伊藤　元夫
宮城県　若生　利廣
埼玉県　乳井　英伸　竹本　佳徳
田中　伸明　近　和子

千葉県　川村　京
石井由美子
沖　周治
井手　勝美
小芝　正一
東京都　牧　重勝
鷹見　昇
波多野義昭
原島　健
佐藤　千夏
金岡　弘大
佐々木　勉
伊藤　寛行
木下　保
神奈川県　山縣　博子
島津和貴男
三田村淳市
新潟県　猪口　輝雄
福井県　安永真理子
静岡県　清水　忠和
愛知県　大石　文代
滋賀県　藤本　英憲
大阪府　南浦　陽一
沢田　進
兵庫県　西村　征夫
鳥取県　大塚　義朗
岡山県　坂井　孝匡
香川県　肥塚　肇雄
福岡県　時重　英之
長崎県　岡　康雄
小林　文夫
市原　直
高橋　光一
永田　健二
田中久仁子
工藤　信一
高木　美歩
村上喜美夫
梅原　利浩
松澤　健
氏家　康守
白鳥　正人
棟久　律子
本川　悟
荒井　清司
若月　良介
桜井　實
中田真理子
谷口　大造
野澤　和浩
土井　貴明
森　義範
宮崎県　荒木　秀一

◆　◆　◆

会員訃報（敬称略）

謹んで哀悼の意を捧げます。

岩手県　葛巻　久八（27・6・12）
宮城県　小畑　威（27・6・21）
埼玉県　園田　鉄夫
中村　善治
東京都　渡邉　有
三宅　寿一
神奈川県　出雲　博（27・6・10）
静岡県　鈴木　義一
愛知県　石原　金三
滋賀県　辻　浩
兵庫県　崎島十四夫
福岡県　添田　裕吉

会報『特攻』第106号正誤表

次のとおり誤りがありましたので訂正し、謹んでおわび申し上げます。

（訂正箇所）
3頁2段目
航空自衛隊退職者団体つばさ会
誤　会　長　藤　川　壽　夫
正　会　長　吉　田　　正
副会長　藤　川　壽　夫
42頁3段目22～23行目
誤　林伊夫中尉
正　林尹夫中尉

会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願い、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革
昭和34年5月前身の特攻平和観音奉賛会が全国組織化
昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足
初代会長　竹田　恒徳　元宮様
二代会長　瀬島　龍三　氏
平成5年11月財団法人認可
三代会長　山本　卓眞　氏
平成23年1月公益財団法人認定
現理事長　杉山　蕃　氏

○当顕彰会の主な事業
・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
・広報誌等の発刊
・講演会等の開催その他

○年会費
・一般会員　3000円
・学生会員　1000円

〒102－0073
東京都千代田区九段北3－1－1
靖國神社遊就館内　公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電　話03－5213－4594
FAX03－5213－4596

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1　原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願いします。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。

3　慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4　原稿、写真等は、原則としてお返しいたしませんが、必要の場合は、その旨お書き添えください。

5　会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛としてください。

記

〒102－0073
東京都千代田区九段北3－1－1
靖國神社遊就館内　公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電　話03－5213－4594
FAX03－5213－4596